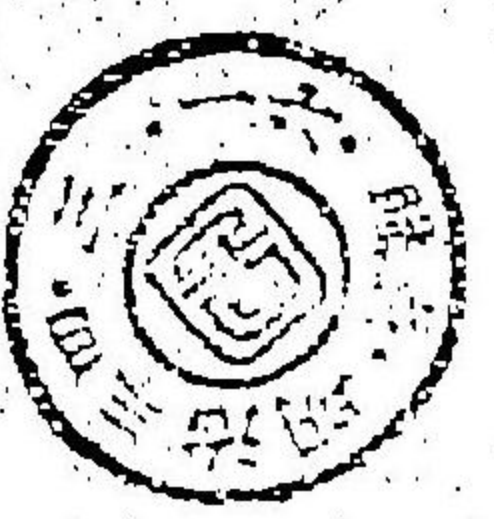


中等東洋史

高等師範學校教授
文科大學講師 那珂通世校閱
大學院學生 桑原隲藏編著



發兌 大日本圖書株式會社

中等東洋史下卷目次

近古期 蒙古族最盛時代

第一篇	契丹及北宋	
第二章	契丹の興起	一
第二章	五代の形勢及契丹の南侵	四
第三章	宋の一統	九
第四章	高麗の興起及遼の極盛	一六
第五章	西夏の興起	一九
第六章	神宗の制度改革及其外國經畧	二一
第七章	新舊兩法黨の爭	二六
第二篇	女眞及南宋	

第一章 女眞の興隆と遼の滅亡と……………三〇

第二章 金と宋との交戦及宋の南渡……………三五

第三章 南宋と金との和戦……………三八

第四章 麟和後に於ける金の形勢……………四四

第五章 韓侂胄の専權……………四八

第三篇。蒙古

第一章 蒙古の興起……………五一

第二章 蒙古の西征以前に於ける中央亞細亞の形勢……………五七

第三章 成吉思汗の遠征……………六三

第四章 西夏及金の滅亡と拔都の西征と……………七〇

第五章 蒙古の南方經畧及旭烈兀の西征……………七五

第六章 世祖の即位と宋の滅亡と……………八〇

第七章 元初に於ける蒙古の狀態……………八三

第四篇 元及明初

第一章 世祖の内治外征……………八九

第二章 海都汗の叛亂……………九五

第三章 元の衰微……………一〇二

第四章 元の滅亡と明の興起と……………一〇七

第五章 明初の外征及内治……………一一三

第五篇 元末明初の塞外の形勢

第一章 察合臺伊兒兩汗國の衰亡と帖木兒の興起と……………一二一

第二章 欽察汗國の盛衰と帖木兒の雄圖と……………一二五

第三章 瓦剌の極盛……………一三三

第六篇 明の中世及末世

第一章 宦者の専權と明室の衰微と……………一三七

第二章 明と韃靼との關係……………一四二

第三章 倭寇及朝鮮の役……………一四五

第四章 明末の黨争……………一五〇

近世期 歐人東漸時代

第一篇。清の初世

第一章 滿州の興起……………一五五

第二章 漠南蒙古と清との關係及明の滅亡……………一五九

第三章 歐人の遠航と耶穌教の東漸と……………一六七

第四章 俄羅斯の東侵及清と俄羅斯との關

係……………一七五

第二篇 清の塞外經畧

第一章 準噶爾部の跋扈……………一八一

第二章 清と喀爾喀及準噶爾部との關係……………一八七

第三章 清の官制及兵制……………一九五

第四章 清の西南方經畧……………二〇二

第三篇 英人の東漸

第一章 帖木兒後の中央亞細亞の形勢及莫臥兒帝國の盛衰……………二〇九

第二章 英國の印度侵畧……………二一九

第三章 阿片戦争……………二二八

第四篇 中央亞細亞の形勢

第一章 回教徒の叛亂……………二三五

第二章 魯國の中央亞細亞侵畧……………二三九

第三章 英魯兩國の衝突……………二四五

第五篇 太平洋沿岸の形勢

第一章 後印度諸國の狀躰及佛國の侵畧……………二五一

第二章 朝鮮の狀躰及日清の衝突……………二五七

附 錄

中等東洋史年表略

中等東洋史

文學士 桑原隲藏 著

近古時期

第一篇 契丹及北宋

第一章 契丹の興起

阿保機以前の契丹

契丹は蓋通古斯族に屬す。南北朝の初、其部衆潢河（西喇木倫）附近を根據地として、内蒙古東部一帯の地を占領し、隋唐の際には常に支那に羈縻せられしが、安祿山の亂後、唐室の衰微せるに乗じ、やや南を侵して地を開けり。其國もと八部に分れ、各大人を戴き、八部の大人より、更に一大人を推して全八部を統領せしめ、三

契丹の興起

契丹の阿保機
始めて皇帝を
稱す

契丹の太祖四
隣を征す

年を以て交替の期となせしが、皇紀千五百六十七年、耶律阿保機契丹を統領するに及んで、漢人の難を避けて、其國に來れる者を任用して、法度を改革し、専ら中央集權を圖り、遂に諸部の大人を誘ひ殺し、交替の制を廢し、世襲の基を定めて皇帝を稱す。之を契丹の太祖となす。時に皇紀千五百七十六年なり。太祖已に國內の革新を終へ、斯に四隣を征伐せんと欲し、先北に向うて室韋、女眞の諸部を侵す。女眞は黑龍江の下流地に蕃殖せし通古斯族にして、室韋は其西北に當り、黑龍江の中流沿岸を占領せし蒙古族なり。尋で西に向うて回紇の地を畧し、或は青海附近に吐谷渾及黨項の諸部を降し、或は流沙を踰えて、天山附近の諸城を征せしが、遂に東に還りて渤海國を撃つ。渤海國も亦通古斯族の建設に係る。通古斯族の一種に靺鞨部

黑水靺鞨と粟
末靺鞨と

渤海國の興亡

あり。南北朝の時、滿州地方に散在して、數十部に分る。就中黑水、粟末の二部尤強し。黑水靺鞨は黑水(黑龍江)附近を占領し、粟末靺鞨は其南に在りて、粟末水(松花江)の沿岸に蕃殖せしが、皇紀千三百五十年の頃、大祚榮、粟末靺鞨の部長となるに及んで、其勢威頓に強大を加ふ。唐の睿宗之を封じて、渤海郡王となす。是より國號を渤海と改む。時に皇紀千三百七十三年なり。大祚榮の後、其子武藝、其從玄孫、仁秀等、皆賢明にして國勢益張り、其領土東は日本海に莅み、西は契丹と接し、南は新羅に連り、北は黑水以下の諸靺鞨部を轄して、隱然東方の一強國なりしが、仁秀の後、四傳して湮湮誤誤に至り、國勢寢振はず、契丹の太祖是時に乘じて渤海國を撃ち、國都忽汗城(吉林寧古塔附近)を圍みて遂に之を降す。實に皇紀千五百八十六年なり。

契丹の領土

契丹渤海を降してより、其領土は内蒙古、滿州を包み、西は吐蕃、回紇、大食、東は新羅の諸國も亦、皆前後來貢せり。太祖は渤海征伐の年を以て死し、子太宗立ちて支那を侵畧せんことを圖る。當時唐室已に滅亡し、群雄諸方に割據して相攻争せしかば、契丹は容易に其南下の目的を達するを得たり。

第二章 五代の形勢及契丹の南侵

後梁の太祖朱全忠已に唐室を篡うて大梁(即汴、今の河)に據り帝を稱せしが、晋王李克用と舊怨あるを以て、燕王と連和して頻に河東を侵す。已にして克用死し、其子李存勗勗嗣ぎ、先づ燕を滅ぼし、勢に乗じて屢梁軍を破る。是時太祖已に死し、其子末帝遂に存勗に降る。時に皇紀千五百八十三年なり。

晋王李存勗後梁を滅ぼして後唐を興す

鄴都の變及後蜀の建國

後唐亡びて後晋興る

晋王李存勗後梁を滅ぼして、位に洛陽に即く。所謂後唐の莊宗なり。莊宗兵をやりて、岐を降し、蜀を併せ、黄河の南北、關中、四川の地、悉く其版圖に歸せしかば、吳、吳越、楚の諸王も亦前後入貢するに至れり。然れども莊宗是より意滿ち氣驕り、宴樂に耽りしかば、將士怨望して遂に鄴都に叛し、王族李嗣源を奉じて大梁に據る。莊宗之を征せんとして遂に反者の手に斃れ、嗣源洛陽に入りて帝位に即く。之を明宗といふ。孟知祥なる者、この内亂に乗じて四川の地を畧し、成都に據りて後蜀王と稱す。明宗死し子閔帝嗣ぎしが、明宗の養子李從珂反して、洛陽を陥れ、帝位に即く。時に石敬瑭河東を鎮して威名あり。從珂もど之と隙ありければ、兵を遣はし晉陽を圍みしが、敬瑭は契丹の太宗の後援を得て、大に後唐の兵を破り、勝に乗じて大梁に入り

五代の形勢及契丹の南侵

契丹の太宗と
後晋との關係

後漢と後周と

皇紀千五百九十六年帝位を踐む。之を後晋の高祖となす。
 後晋の高祖の天下を得たるは、契丹の力多きに居るが故に、山
 西直隸兩省北邊の十六州を割き、歲に金帛卅万を贈りて其勞
 に酬ひ、且諸事契丹に對して、臣下の禮を執りしが、高祖死し從
 子出帝立つに及んで、頗る禮を契丹に失ひしかば、太宗怒り、皇
 紀千六百七年、大舉南下して出帝を擒にし、自から大梁に據り
 て國を遼と號す。河の南北の諸州概ね之に降る。太宗は中國の
 金帛多きを貪り、頻に兵を放ちて四方を剽掠せしかば、諸民憤
 怨し、所在に盜起りて鎮壓すべからず。太宗遂に守兵を留めて
 北に還りしが、途にして死し、從子世宗位を繼ぎて臨潢(西喇木
流内蒙古の巴林に在り)に歸れり。
 後晋の將劉知遠、曩に太原を守りしが、太宗の北歸するに及ん

後周の世宗

で、遼の守兵を攘うて帝位に大梁に即く。之を後漢の高祖とい
 ふ。一年にして死し、子隱帝嗣ぎしが、多く宿將を忌み殺し、か
 ば、鄴都の鎮將郭威は禍の及ばんことを恐れ、部下を率ゐて叛
 し、大梁に入り、遂に衆に推されて帝位に即く。之を後周の太祖
 といふ。時に皇紀千六百十一年なり。
 是より先き隱帝の叔父劉崇太原を守りしが、是に至りて河東
 に北漢國を建て、援を遼に乞ひ、頻に恢復を圖る。後周の太祖死
 し、世宗新に立つを機とし、遼と兵を合せて後周を侵す。世宗逆
 撃して大に之を高平(山西澤州府高平縣)に破る。世宗英畧大志あり。天下
 を統一せんと欲し、先づ士卒を淘汰し、天下の佛像を銷して兵
 器を鑄、大に軍備を擴張し、尋で西に向うて後蜀の北邊を奪ひ、
 又地を南に開かんことを圖る。

後周の世宗南
唐を伐つ

後周の世宗遼
を伐つ

唐の末年楊行密揚州(江蘇揚州府)に據りて吳王と稱し、江蘇、安徽、江西の地を領せしが、皇紀千五百九十七年其將李昇吳を襲んで南唐國を金陵(江蘇江寧府)に建つ。其子李璟に至り、南の方閩を滅ぼして福建の地を併す。閩は唐末、王審知の建國せし所なりしが、是に至りて亡ぶ。璟又西の方楚を攻めて湖南の地を取る。是に於て其版圖江淮、江南の間に跨り、遂に北の方後周を略せんと欲し、屢遼、北漢、後蜀と使を通せしかば、皇紀千六百十六年世宗先づ發して、南唐を撃ち、連に其兵を破る。南唐遂に和を請ひ、悉く江北の地を獻す。世宗已に南を定め、たれば、皇紀千六百十九年復自から將として、北の方遼を侵す。遼は太宗の後、内訌相繼ぐ。世宗位に即きしと雖ども、五年ならずして反者の手に斃れ、太宗の子穆宗立ちしが、畋遊に耽り、飲

五代

酒を好み、國勢頗る振はず。後周の世宗之に乗じて、悉く瓦橋關(直隸保定府附近)以南の地を奪ひしが、偶、疾に罹りて死し、子恭帝年僅に七歳なりければ、軍士等宿將趙匡胤の、夙に威望あるを擁立して、位に沐に即かしむ。之を宋の太祖といふ。時に皇紀千六百廿年なり。

唐の滅亡してより、群雄割據すること、斯に五十餘年、其間中原を占領せしもの、後梁、後唐、後晉、後漢、後周あり。故に史に之を五代といふ。宋後周に代るに及んで、四方の諸國前後衰滅につき、始めて復一統の政を見るに至れり。

第三章 宋の一統

唐末以來節度使は、其藩鎮に於ける民治、兵馬の兩大權を私有

宋の太祖の
大革新

節度使の權威
を奪ふ

せしが、五代の時天子は、多く其部下の擁立に係り、従うて其威
 嚴重からざるが故に、節度使は益朝廷を輕蔑し、租税の如きも
 概ね留めて上輸せず。而して節度使の勢力は、更に其部下の兵
 士に頼る者なれば、兵士は尤跋扈を極めたり。今や太祖は此宿
 弊を一掃せんが爲に、宰相趙普と謀りて左の方法を行ふ。

(第一)宿將功臣に諭して、節度使を罷めしめ、新に文臣を以て之
 を補欠す。是より節度使の兵權漸く弱し。

(第二)從來節度使の配下たりし州郡は、更めて朝廷に直隸せし
 め、朝廷より特に文臣を派出して通判となし、州郡の政事は、必
 ず通判と共議せしめ、決して專制を得ざらしむ。是に於て武臣
 次第に民政の權を失ふ。

(第三)朝廷より新に轉運使を、天下各地方に任命し、其地方の租

兵士の跋扈を
制す

宋の太祖の經
略北を後にし
南を先にす

荆南及後蜀の
滅亡

税、金穀を管理せしむ。是より節度使は全く財政の權を失ふ。

(第四)禁軍を淘汰し、天下驍勇の士を精選して之に補し、且其兵
 數を増して、地方の總兵數と相當らしむ。是に於て内外輕重の
 宜しきを得、兵士の跋扈も亦漸く息む。

已に民治、兵馬、財政の三大權を朝廷に收めて國內の革新を終
 へたれば、今や外に向うて列國を討滅し、天下を統一せんこと
 を圖る。

當時列國の宋に従はざる者、北に北漢あり。北漢は遼の後援あ
 りて、一朝に討滅し難ければ、姑く之を措きて、先づ南方の經略
 に従ふ。時に南唐已に衰へ、湖南の地獨立して群雄相争ふ。太祖
 之を機とし、慕容延釗をやりて其亂を平げ、且、遂荆南を過ぎ、襲
 うて其國を降さしむ。荆南は五代の初、高季興の建國に係り、湖

南漢の興亡

北の一部を占領し、後唐、後晋、後漢、後周に歴事して國命を維ぎしが、是に至りて亡ぶ。後蜀は大に恐れて、北漢と宋を夾撃せんことを圖りければ、皇紀千六百廿五年太祖王全斌をして、急に襲うて後蜀を降さしむ。是に於て湖南、湖北、四川の地悉く宋に歸し、宋の南境は直ちに南漢と接す。

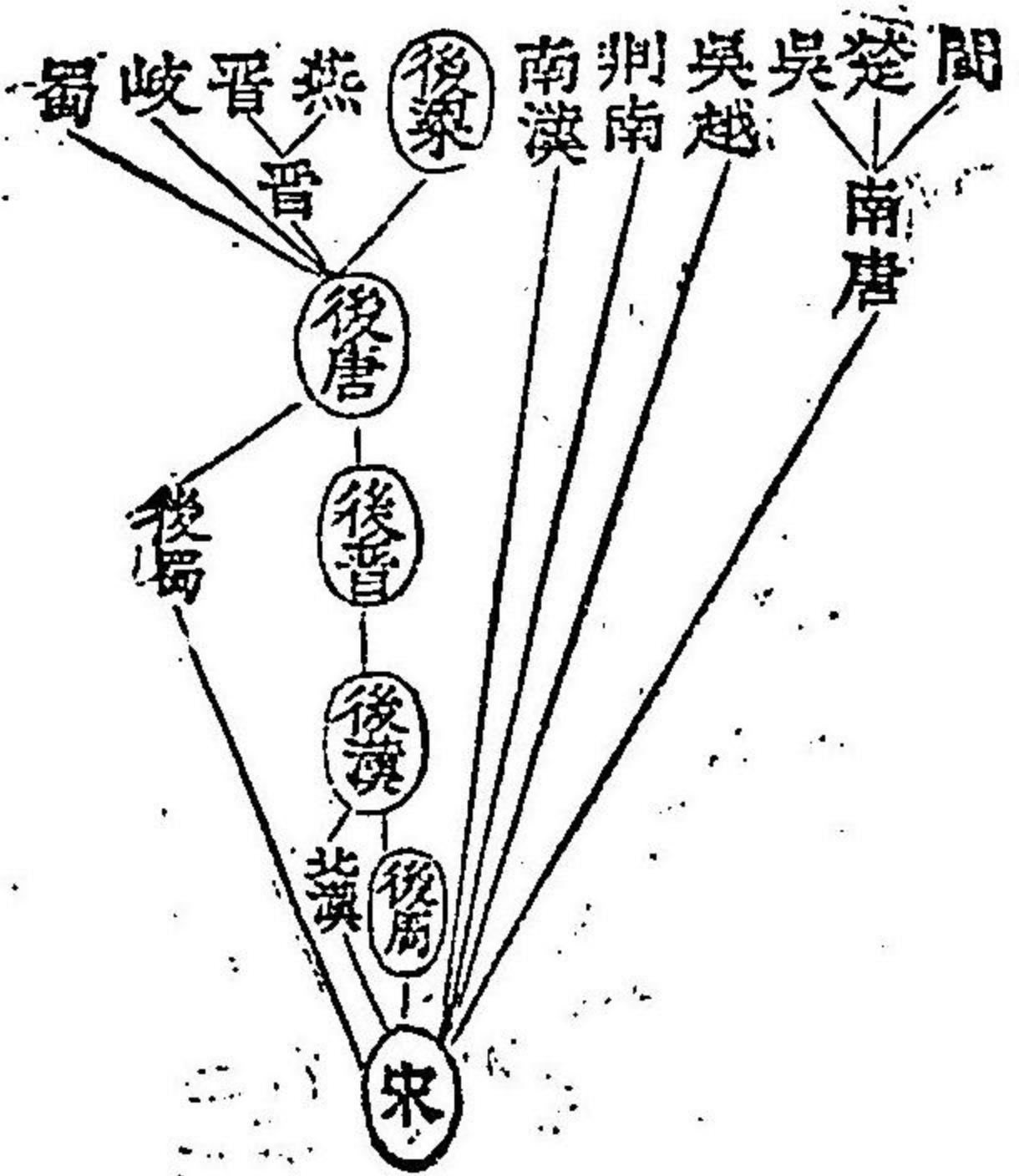
南漢は五代の初、劉儼の建國に係る。儼は廣州(廣東廣州府)に都し、兩廣及交趾を併せて南方の一強國なりしが、宋の湖南を取るに及んで、儼の孫劉鋹屢兵を出して其境を侵し、かば、皇紀千六百三十一年宋將潘美遂に之を滅ぼせり。南方の列國今や僅に南唐と吳越とを餘す。

南唐及吳越

南唐は一時南方の一大強國なりしが、後周の世宗の時、其江北の地を失ひ、尋で又湖南の地を失ひ、國勢日に振はず。宋將曹彬

太宗北漢を滅ぼして天下を統一す

吳越と兵を合せて遂に之を降す。幾ならずして吳越の地も亦宋に歸し、南方全く平定せしかば、太祖は更に北に向うて北漢を撃ちしが、中途にして死し、弟太宗其志を紹ぎ、北漢を滅ぼして天下を一統せり。實に皇紀千六百三十九年なり。今左に略表を掲げて、列國興亡の跡を明にすべし。



交趾即安南

丁部領擢越國
を立つ

黎桓丁氏に代
はる

太宗已に支那内地を統一し、又國境を開かんことを圖る。是に於て南北兩方面に於て、交趾及遼との關係起る。

(第一)交趾との關係 交趾は唐の安南都護府の所在地なるを以て、又安南の名あり。もと唐に隸屬せしが、五代の時、南漢の衰微するに及んで、漸く獨立の姿をなし、丁部領なる者其地に據りて、瞿越國を立つ。宋の太祖の南漢を滅ぼし、時、部領入貢せしかば、太祖之を交趾郡王に封ぜり。時に皇紀千六百卅三年なり。已にして部領死し、内亂ありければ、太宗之に乗じて皇紀千六百四十年、南伐の師を起し、が、炎熱の爲め功なくして還る。是時瞿越の軍事總督に黎桓あり。外寇境に蒞み、國內騷擾せるを機とし、丁氏を廢して國王となり、皇紀千六百五十三年宋に來貢せしかば、太宗は之に交趾郡王を授けて、兩國の交を厚く

契母の耶律休
哥

す。交趾是より一外國となれり。

(第二)遼との關係 皇紀千六百三十九年、宋の太宗は北漢を滅ぼし、勢に乗じて、遼の南邊を侵す。時に景宗穆宗に嗣ぎて遼に君たり。耶律休哥を遣り、大に宋軍を高梁河(北京の西)に破り、明年進んで瓦橋關を圍む。爾後廿五年間、宋、遼二國の好全く絶え、河北の地は常に交戰の區となる。

皇紀千六百四十二年、景宗死して子聖宗嗣ぐ。年甫めて十二、母后蕭氏政を攝し、聰明にして將士の心を得たり。耶律休哥の智略あるを擧げて、専ら宋と相防がしむ。宋の太宗は聖宗の新に立つを利し、曹彬をして大軍を率ゐて遼を伐たしむ。休哥逆擊して大に之を岐溝關(直隸順天府涿州)に破り、深く内地を掠む。宋は是より一意防戰に力め、復進取の勢なし。高麗、女眞の二國も、と宋

澶州の役と遼
宋の婦和と

と遼を夾撃するの約ありしも、宋の進取に意なきを見て、皆遼に降れり。皇紀千六百五十七年太宗死し、眞宗嗣ぐに及んで、聖宗大舉して宋を侵す。宋の宰相寇準眞宗を奉して澶州(直隸大名府)に至り、遼軍を却く。然れども宋は交戦頻年なるに懲り、遂に歳幣銀十萬兩絹廿萬匹を遼に贈りて和を結べり。時に皇紀千六百六十四年なり。

第四章 高麗の興起及遼の極盛

皇紀千三百年代の初半に、新羅は朝鮮の地を一統し、聖德王、景德王等の明君輩出して、國內頗る太平なりしが、其後次第に衰微し、景德王の後十六代を経て、皇紀千五百四十七年眞聖女王新羅に君臨するに及んで、倭幸權を弄せしかば、群雄四方に起

朝鮮又三國に分かる

高麗の一統

る。甄萱は完山(全州府道)に據て、國を後百濟と號し、弓裔は鐵圓(江原道鐵原府)に據て朝鮮北部の地を陷る。已にして其部將王建別に松嶽(京城道開城府)に據り、高麗國を建て、悉く弓裔の領土を併す。之を高麗の太祖となす。是に於て朝鮮復分て、新羅、高麗、後百濟の三國となる。後百濟勢尤強して、新羅の國都慶州(慶尙道)を陷れしかば、新羅は降を高麗に請ふ。高麗の太祖之を納れ、屢後百濟と戦ひ、遂に之を滅して朝鮮を一統す。實に皇紀千五百九十六年なり。太祖の孫成宗の時、聖宗正に遼に君たり。高麗の宋と通ずるを怒りて之を伐つ。成宗援を宋に請ひしも、應ぜざりしかば、皇紀千六百五十三年遂に遼に降る。成宗死し、穆宗繼ぐ、康兆なる者之を弑して顯宗を立つ。是に於て皇紀千六百七十年、遼の聖宗自から四十萬の大軍に將として、康兆の罪を問ふ。高麗の軍防

高麗と遼との
關係

渤海の大延琳

聖宗時代に於
ける遼の強盛

戦して利あらず。國都開京(京畿道開城府)陥り、顯宗羅州(全羅道)に奔る。己にして遼主一旦其師を還せしが、爾來遼兵頻年入寇せしかば、高麗遂に貢を納れ臣を稱す。時に皇紀千六百七十九年なり。聖宗己に南宋と和し、東高麗を降し、今や西に向うて河西の回紇を征し、又東に向うて渤海の遺族の、吉林の地に據る者を滅ぼす。渤海は太祖の末年、己に遼に降りしと雖ども、其餘衆諸方に散在し、往々恢復を圖る。是に至りて大延琳なる者遼に叛き、國を興遼と號せしが、遂に大敗して擒となり、渤海の地全く遼に入る。時に皇紀千六百九十年なり。當時遼の領土、東は日本海に莅み、西は天山の麓に接し、南は支那本部の北部を包み、北は外蒙古の臚胸河(今之克魯倫河)に至り、國中に五京を建つ。臨潢を上京とし、遼陽を東京とし、内蒙古東隅の大定(喀喇沁右翼之南)を中京とし、

今の北京を南京とし、後又山西の大同を西京とす。其貢を納れ臣を稱するもの、高麗、吐蕃、吐谷渾、黠戛斯以下、凡て六十國、遼は實に當時東方亞細亞の最大強國たり。

第五章 西夏の興起

太宗眞宗の世、宋は連年遼と事を構ふるに乗じ、西夏新に國を建て、頻に宋の西邊を窺ふ。西夏は黨項の後にして、圖伯特族に屬す。唐の太宗の時、黨項唐に内降せしが、後吐蕃の勢を得るに及んで、屢其攻略に遭ひ、唐に請うて陝西の東北部に移り、衆漸く蕃殖す。唐の末、其部酋に拓跋思恭なる者あり。黃巢の亂に唐を援け、功を以て夏國公に封せられ、姓を李と賜ふ。是より其子孫世、夏州(鄯州南)に據りて、近傍の諸州を統べ、殆一獨立國

宋以前に於ける夏國

西夏の李元昊
河西を併せ陝
西を侵す

をなす。太宗の時李繼捧其國に主となり、始めて宋に入朝せしが、其族弟李繼遷は同志を率ゐて遼に降り、夏王に封ぜられ、遂に繼捧の衆を併せて屢宋の邊境を侵す。子德明嗣ぎ、姑く遼と宋とに臣事せしが、德明の子元昊立つに及んで、雄略大志あり。時に河西の回紇部已に遼に叛きて、復獨立の姿をなしければ、元昊撃ちて之を降し、悉く其地を併せ、都を興慶(甘肅省寧夏府)に奠め、黄河を阻て、賀蘭山に依りて固となし、大夏皇帝と號す。雄兵五十万あり。遂に其鋒を東して宋の邊境に逼る。宋は眞宗已に死し、子仁宗位に在り。韓琦、范仲淹等をして之を防がしむ。互に勝敗ありて、陝西の地長く兵馬の區となる。遼の聖宗は皇紀千六百九十年を以て死し、興宗嗣ぐ。宋の西夏と事あるに乗じ、兵を南京に聚めて南下の勢を示し、後周の世宗

宋と西夏との
媾和

の略せし故地を得んとせしかば、仁宗は歲幣銀帛各十万を増して、僅に和を請へり。遼已に宋と和し、更に宋と西夏とに説きて兵を罷めしむ。是に於て宋は西夏に歲幣銀帛廿五万を與へ、夏は宋より封册を受け、臣下の禮を執るを約して西國の和睦成る。時に皇紀千七百三年なり。

第六章 神宗の制度改革及其外國經畧

宋は唐末五代に於ける、藩鎮の跋扈と兵士の專横とに懲り、建國以來其宿弊を改むるに急にして、遂に之が爲に其國力の弱きを致し、太宗先づ交趾に失敗し、眞宗次に遼に失敗し、仁宗も亦西夏に失敗せり。故に此屈辱を雪ぐは、實に宋の一大急務なり。然れども仁宗の世には、皇后郭氏の廢立よりして、朝臣二派

宋の大屈辱

宋の財政の大困難

王安石の新法

に分れて相争ひ、仁宗死して嗣子なく、太宗の曾孫英宗大統を継ぎし時は、其實父の追禮に就きて、朝臣復一致せず。此の如く内に黨争多くして、未だ力を外事に盡す能はず。英宗の子神宗立つに及んで、年若くして氣鋭なりければ、武を用ゐる邊を開きて國威を張らんと欲せしが、年々遼及西夏に多額の歳幣を贈ると、建國以來功臣を優待して、濫に其子孫一族に官爵を授けしと、此二理由よりして當時宋の財政頗る困難を極め、先づ國庫を充實するの必要ありければ、神宗は王安石を登庸して、富國強兵の二大目的を達せしむ。

(第一) 安石は富國の目的を達せんが爲に、左の新法を行ふ。

(1) 青苗法 挿苗の時期に、朝廷より資金を百姓に貸與し、秋熟の時期に、資金に二割若くは三割の利子を添へて、朝廷に還附

王安石の富國策

強兵

せしむ。

(2) 募役法 人民に相當の免稅を納めしめて、服役の義務をとき、朝廷は別に無職の民を募りて、役に充つ。

(3) 市易法 京師に市易務なる官省をおき、市場に賣れざる物品を官に購買し、若くは官物と交換し、又商人に資金を貸與して、規定の利子を納めしむ。

(第二) 強兵の目的を達せんが爲には、左の新法を行ふ。

(1) 保甲法 一種の民兵制度にして、十家を保とし、五百家を都保とし、都保に正副二人をおき、其部下の保丁をして、弓箭を貯へ、武藝を講習せしむ。

(2) 保馬法 保丁に官の馬を貸與し、其死病する時は、相當の辨償をなさしむ。

神宗已に安石を擧げて、内に當國強兵の策を建て、今や外國の
經略に従ひ、斯に復西夏及交趾との關係起る。

大越の建國

(第二)交趾との關係 交趾郡王黎桓宋に通して後、凡そ十三年
にして、其宿將李公蘆、黎氏を黜け自立して國號を大越と稱す。
時に皇紀千六百七十年なり。其子德政の時、南占城(今の交趾支那)眞臘
(今の暹羅)の諸國を破り、其孫日尊の時、大に國內の制度を改正し、
國運日に興る。日尊の子乾德は、正に神宗と其世を同くす。神宗
は大越が占城との交戦に困憊せるを機として、竊に之を撃た
んとす。乾德大に怒り、皇紀千七百三十五年大舉して宋の南境
を侵し、宋國の爲に新法を除くを口實とす。宋は郭逵をやり、占
城、眞臘の二國と與に大越を夾撃せしむ。大越敗れて和を請ふ。
然れども宋軍の死亡する者も亦過半にして、遂に國威を南に

宋は占城眞臘
と同盟して大
越を伐つ

張る能はず。

(第二)西夏との關係 西夏の李元昊宋と和してより斯に廿餘
年、西邊頗る無事なりしが、神宗位に即くに及んで、宋軍西夏を
襲ひしより、兩國の和議復破る。時に元昊の子秉常夏に王たり。
屢、宋の邊境を擾す。是に於て王韶なる者先づ河湟の地を取り、
西夏と吐蕃諸部との連絡を絶ち、而して後西夏を伐つべきを
上言せしかば、神宗彼をして河湟の地を恢復せしむ。王韶連に
邊境を開くと雖ども、兵士の死亡甚だ多く、且吐蕃の諸部叛服
常なく、爲に西夏を屈する能はず。皇紀千七百四十一年西夏に
内亂あるを機として、宋は大舉して其地を侵せしが、反つて大
敗せしかば、遂に復和議を講ずるに至れり。
初め神宗西夏を滅ぼし、交趾を降し、而して後力を遼に専らに

王韶の西方經
略

し、北邊を恢復して國威を張らんと志せしが、皆意の如くならざるのみならず、遼は宋の西夏と難あるに乘じ、新に兩國の境界を定むるを名として、宋の北邊を奪ふ。宋争ふ能はず。此の如くして神宗の外國經略は全く失敗せり。

第七章 新舊兩法黨の争

神宗の政策は、啻に外國經略に於て失敗せしのみならず、又國內に於ける黨争の基を開けり。抑、王安石の新法は、もと國庫の充實を目的とせしが故に、人民一般に之を喜ばず。當時の名臣、歐陽脩、司馬光等は、其祖宗の制に違ふを以て、主として之に反對を試み、而して當時の學者も亦概ね之を非難せり。宋の學者は、一方にては漢唐の學者の古典の註疏のみに齷齪

たりし反動として、一方にては六朝隋唐以來流行せし佛教、殊に禪宗の影響として、文字の訓詁をすて、經傳の義理を講ずるを尙ぶ。仁宗の時、周敦頤(濂溪)、胡瑗(安定)ありて、其の氣運を啓き、尋で神宗の時、程顥(明道)、程頤(伊川)の輩出で、其後を繼ぎ、遂に所謂宋學の一派を開き、盛に天下の政治を是非する傾向を生ぜり。彼等は王安石の新法を以て、先王の政を破壊する者となし、歐陽脩、司馬光等を助て極力之を攻撃し、此の如くして朝廷に新法舊法の兩黨派を生じ、互に相軋轢するに至れり。皇紀千七百四十五年神宗死し、子哲宗嗣ぐ、年幼なりしかば、太皇太后高氏政を攝し、安石の黨を退け、司馬光以下の舊法黨を任用し、悉く新法を罷む。幾ならずして光死し、舊法黨は其酋領を失ひ、各黨派を分ちて相攻争す。新法黨の酋領章惇(景文)是に乘じ

兩法黨互に相
摺拵す

て、漸く其黨勢を恢復し、哲宗の政を親らするに及んで、朝廷の大權を握り、復新法を行ひ、極力反對黨を貶竄す。皇紀千七百六十年、徽宗哲宗に繼ぎて位に即く。亦年幼なるを以て、太后向氏政に預り、韓忠彥等の舊法黨を用ゐて、新法黨を退けしが、徽宗政を親らするに及んで、復舊法黨を退け、蔡京新法黨の酋領として政權を握る。神宗以來新舊兩法黨政權を相争ふもの斯に卅年、其更替大略左表の如し。

帝王	黨派	酋領	執權年限
神宗	新法黨	王安石	一七四五以前
哲宗	舊法黨	司馬光	一七四五—一七五四
徽宗	新法黨	章惇	一七五四—一七六〇
徽宗	舊法黨	韓忠彥	一七六〇—一七六一
徽宗	新法黨	蔡京	一七六一以後

蔡京の專權

蔡京童貫をして西方を經營せしむ

徽宗暗愚にして奢侈を好み、大に土木を起し、四方の珍奇を致す。又道教を信じ、宮觀を建て、方士を寵す。是を以て費用費られず。蔡京は新法を復し、收斂を圖り、専ら應奉を力めて帝の寵遇を固くし、獨り國政を擅にするもの殆廿年、子蔡攸も亦權勢父に亞ぎ、朝廷其族黨を以て充滿するに至る。

蔡京又邊功を立て、其威望を増し、帝の信任を厚せんと欲し、廣西、貴州、雲南地方の諸蕃族を招致し、又童貫等をやり地を西に開かしむ。童吐蕃を撃ちて河湟の地を復し、又西夏を圖る。時に李秉常の子、乾順西夏に王たり。吐蕃と兵を合て宋軍を防ぎ、互に勝敗あり。是より關中隴西の地復長く兵馬の區となる。童貫河湟の地を復してより、頗る其功を自負し、遼も亦圖るべしとなし、自から請うて遼に使し、其虚實を覘ふ。馬植なる者志

宋女真と通じて遼を夾撃せんとす

を遼に得ずして怨望する所あり。貫に見えて女真と遼を夾撃するの策を獻ず。貫大に喜び伴ひ歸りて盛に其策の従ふべきを説く。徽宗遂に使を遣り、海道より女真に通ぜしむ。是に於て宋と女真の連合始めて成る。時に皇紀千七百八十年なり。

第二編 女真及南宋

第一章 女真の興隆と遼の滅亡と

女真はもとの靺鞨にして、通古斯族に屬す。靺鞨諸部中粟末、黑水の二部尤、強大を以て聞ゆ。渤海は即粟末靺鞨にして、女真は即黑水靺鞨なり。黑龍江の沿岸に蕃殖し、西北は室韋に接し、西南は渤海と連り、東は日本海に莅む。渤海の盛時之に役屬せら

生女真と熟女真と

烏古廼と阿骨打と

れしが、遼の渤海を滅ぼすに及んで、其西南部、即混同江(松花江)附近に在る者は、遼の版籍に列し、之を熟女真といひ、其東北部、黑竜江より長白山の間に散在する者は、唯其羈縻を受け、之を生女真といふ。按、出虎水附近の生女真に完顔部あり。皇紀千七百年の初、烏古廼なる者其部長となり、雄武にして近隣諸部を従へ、勢漸く張る。遼命トて生女真の節度使となす。烏古廼は皇紀千七百卅四年を以て死し、其後嗣皆力めて境土を開き、勢益振ふ。烏古廼より五傳して其孫阿骨打に至る。阿骨打は皇紀千七百七十三年を以て生女真に主となり、翌年遂に遼に背く。遼は聖宗の世を以て其最盛期となし、子興宗の時猶國威を墜さしめしが、興宗死し子道宗嗣ぐに及んで、耶律乙辛なる者を親任してより、内は賢臣朝を去り、外は羈縻の諸部漸く反し、國

遼の國威漸く衰ふ

金の太祖遼を破る

金と宋との同盟

第一回の媾和條件

運已に傾く。皇紀千七百六十一年道宗の孫天祚帝其後を承け、淫虐にして國政を顧みず。阿骨打之を機とし、連に遼兵を破りて混同江附近の諸部を降し、皇紀千七百七十五年遂に國號を建て、金といひ、皇帝を稱す。所謂金の太祖なり。天祚帝大軍を率ゐる親征して混同江に至りしが、陣中亂作るを以て引き還る。太祖追撃して之を破り、熟女眞を降し、遼の東京を陥れ、益兵を進めて遼の上京に逼る。是時宋使正に金に來り、遼を夾撃せんことを約す。其條件次の如し。

(第一)金は北より遼の中京を攻むると同時に、宋は南より遼の南京を取りて之を夾撃すべし。

(第二)成功の日は、後晋の時契丹に與へし、支那本部の地は宋に歸し、自餘の遼地は悉く金の有とすべし。

宋軍遼の南京を攻めて敗北す

(第三)宋は從來遼に與へし歲幣を金に贈るべし。

是に於て太祖兵を進めて遼の上京中京に勝ち、天祚帝を追うて又西京を陥る。宋乃、約に従ひ、童貫、蔡攸等をして遼の南京を攻めしむ。遼將の南京を留守せる者、力戰して屢、宋軍を破る。貫等遂に進む能はず。太祖宋軍の成功なきを見、居庸關(直隸順天府昌平州北の西)より入りて南京を陥る。

金は宋が出軍の期を失し、且其南京を下す能はざりしを口實とし、前約を履むを拒む。宋は既定の歲幣の外、毎歲錢百万緡を贈り、且南京攻陥の慰勞として、糧廿万を輸するを約して、僅に南京と其附近の六州とを得たり。時に皇紀千七百八十二年なり。翌年金の太祖死し、弟太宗立ち、西に向うて遼の天祚帝を撃たんとす。

西夏金に降服す

遼の滅亡

耶律大石西遼國を建つ

西京已に金に降り、南京も亦宋に歸してより、天祚帝は適歸する所なく、西夏に走りて李乾順に依らんとす。金は西夏に陰山以南の地を與へて、天祚帝を納るゝなからしむ。西夏遂に藩を金に稱す。天祚帝西夏の金と通ずるを見て、黨項に投ぜんと欲し、遂に金軍に獲らる。遼は建國より斯に至るまで凡そ二百年、皇紀千七百八十五年を以て亡ぶ。

遼の皇族に耶律大石あり。遼の亡びんとするや、餘衆を率ゐる西に走りて興復を圖り、別失八里(今の烏魯木齊)に至る。天山南路の回紇諸部前後來歸し、勢大に張る。乃軍を進めて中央亞細亞に入り、尋思罕(今の撒馬兒罕)をどり、遂に國を西遼、一に黑契丹と號し、都を吹河上の虎思幹耳朵に奠む。之を西遼の德宗といふ。時に皇紀千七百八十六年なり。然れども其興復の素志を遂げずして死し、

子孫相繼ぎて葱嶺の東西に君臨し、一時中央亞細亞の一大強國となる。

第二章 金と宋との交戦及宋の南渡

金宋を伐ち汴京に逼る

金已に遼を滅ぼし、宋と壤を接してより日に南下して、河北を併呑するの機を窺ふ。宋が或は金の叛將を納れ、或は遼の遺臣を招き、且、所約の糧廿万石を輸せざるに及んで、遂に皇族粘沒喝、幹離不を將として、兩道より宋を伐たしむ。粘沒喝は山西の北邊より太原を圍み、幹離不は直隸の北邊より燕京(今の北京)を陥れ、長驅して汴京に逼る。

時に宋の徽宗は唯土木を營み、宴樂に耽り、兵備全く廢弛す。金軍入寇するに及んで、倉惶爲す所を知らず。急に位を其子欽宗

に傳へ、且己を罪するの詔を下して、四方勤王の師を徵す。欽宗已に立ち、國都を南に遷して、金兵を避けんとす。李綱固く諫めて、汴京を死守す。然れども、朝臣皆鬪志なく、切に媾和を望む。欽宗遂に使を遣りて、和を金に請はしむ。金の要求大略左の如し。
(第一) 犒師料として、金五百万兩、銀五千万兩、牛馬万頭、表段百万匹を輸送すべし。

(第二) 中山(直隸定州)、太原(山西原府)、河間(直隸河間府)、三鎮の地を讓與すべし。

(第三) 宋帝は伯父に對する禮を以て、金帝に事ふべし。

(第四) 宰相及親王各一人を質とすべし。

宋は其要求を聽くと雖ども、所約の犒師料を輸する能はざるを以て、金人尙汴京を圍みしが、四方勤王の兵漸く集るに及んで、變を懼れて俄に引き還れり。

金軍去りてより、宋は約に背き、密に三鎮に命じて固守せしめ、又遼の舊臣の金に在る者を招誘し、且金の使者を囚へしかば、太宗大に怒り、大舉して南侵す。粘没喝は太原を拔き、河東の地を定めて、直に汴京に逼り、幹離不も亦河北を定め、粘没喝と合して汴京を圍む。是より先き、李綱種、師道等、頻に兵備を嚴にして、金人の再侵を防がんと請ふ。欽宗聽かず。又詔して四方勤王の師を罷めしめ、唯使を發して和を金に乞ふのみ。汴京已に圍を受くるに及んで、朝臣等尙和戰の可否を論じて、戰備を講ぜず。城遂に陥る。金人欽宗、徽宗及其后妃皇族を執へ、且汴京の金帛珍寶を竭して北に還る。是に於て河東、河北の全土悉く金に没す。實に皇紀千七百八十七年なり。

時に欽宗の弟、康王構(河南影)、相州(河府)に在り。汴京陥り、二帝北する

に及んで、宋の帝統を繼ぐ。之を高宗となす。高宗即位の初、主として李綱を任用す。綱銳意兵制を改め、軍備を嚴にし、又宗澤、張所等の諸名將を登庸して恢復を圖る。河北、河東の州郡響應し、國勢日に張る。然れども幾ならずして、高宗黃潛善等を寵用して、李綱を罷め、又潛善の言に従ひ金を避けて都を南、揚州(江蘇府)に移す。時に皇紀千七百八十七年なり。揚州は南に在るを以て、史に之を南宋といひ、以て汴京の北宋に別つ。宋は一たび南してより、河南、關中、江淮の地、相續きて金の有に歸し、遂に恢復の望なきに至る。

第三章 南宋と金との和戰

金の太宗は宋が李綱を罷め、都を南に移すと聞き、之に乗じて

三道より南伐せしむ。婁室は西に向ひ、潼關を破りて關中を下し、兀朮は東に向うて山東の地を畧し、粘沒喝は中道を取て河南に向ふ。宗澤四方の義士を募りて汴京を固守す。兀朮、粘沒喝等進む能はず。已にして宗澤没して汴京陷る。金軍長驅して揚州に至る。高宗江を渡りて難を杭州(浙江省杭州府)に避けしが、金軍尋で江を渡りしかば、高宗は遂に温州(浙江省温州府)に奔り、韓世忠をして江淮の方面を防禦せしめ、張浚をして關西の方面を防禦せしむ。浚は關中より河南に出で、以て金人の虚を搆き、其南侵を牽制せんとせしが、金將婁室富平(陝西西安府富平縣)に逆撃して、大に之を破ぶる。西夏王李乾順も亦宋の敗亡に乗じ、金と同盟し、頻に兵を南に出して邊境を開き、復宋の封冊を受けず。

金の太宗の南伐するや、漢族の歸服せざるを恐れ、漢人を選ん

で其藩輔となさんと欲す。已に河南の地を取るに及んで、粘没喝建議し、宋の降臣劉豫を汴に立て、齊帝となし、河南陝西の地に主たらしむ。齊は金と兵を合して屢、宋を侵す。岳飛、韓世忠等よく之を江に防ぐ。已にして太宗の疾篤きを以て金軍引き還り、宋の高宗も亦北、杭州に還りて都を斯に奠む。時に皇紀千七百九十四年なり。

金の太宗死し、從孫熙宗繼ぐ。粘没喝は烏古廼の曾孫を以て、太宗の時より軍事を統べて重望あり。是に至りて軍事總督を以て國政に參與し、權勢益盛なり。太宗の子蒲魯虎、及太宗の從弟撻懶等之を忌み、謀りて其黨與を黜く。齊帝劉豫は粘没喝の立つる所なるが故に、蒲魯虎等又其屢宋に敗亡せしを口實として、皇紀千七百九十七年遂に之を廢す。

金の粘没喝、
蒲魯虎及撻懶

秦檜和議を唱ふ

宋の南渡してより高宗連に使を金に遣り、臣と稱して兵をやめんことを請ふ。粘没喝許さず。蒲魯虎、撻懶等金の政權を握るに及んで始めて和を許し、且齊の舊領河南、陝西の地を宋に還附し、懇懇を敵國に示して、自己の勢力を増進せんと欲す。撻懶の舊知秦檜方に宋に相たり。是に於て撻懶、秦檜と謀りて兩國の和議を講ず。檜さきに囚はれて金に在りしが、撻懶の信任を得て南に還り、南北講和の得策たるを主張す。時に高宗の生母章氏、徽宗、欽宗と共に移されて遼東に在り。高宗日夜金と和して、之を召還せんことを欲せしかば、秦檜を登庸して和議を圖らしむ。

金軍の北に還りてより、宋將太宗の喪に乗じ、頻に齊を破りて邊境を恢復せしが、是に至りて秦檜嚴に其進軍を禁じ、使を金

金の兀朮約に背きて南侵す

韓世忠と岳飛

第三回の媾和

に遣りて地を受けしむ。時に金の熙宗は蒲魯虎、撻懶等の跋扈を厭ひ且、宋と通じて國を危くするの異志あるを疑ひ、其叔父兀朮と謀りて之を誅戮し、遂に約に背き兀朮を將として南伐せしむ。宋將韓世忠、岳飛等逆擊して大に之を破る。岳飛は勝に乗じて將に河北の地を平定せんとせしが、秦檜尙和議を持し、詔を請うて其軍を班さしめ、使を金に遣りて兵を罷めんを乞ふ。兀朮已に前敗に懲り、且、撻懶等の遺族漠北に叛し、後顧の患あるを以て、遂に和を許す。時に皇紀千八百一年にして、其媾和の條件左の如し。

(第一)東は淮水、西は大散關(陝西鳳翔府寶雞縣の南)を以て兩國の界となし、以北を金の領土、以南を宋の領土と定む。

(第二)宋より歲貢銀、絹各廿五万を納むべし。

秦檜反對黨を抑へて文字の獄を起す

(第三)宋の君主は金の封冊を受けて、宋帝と稱するを得べし。

(第四)徽宗の梓宮及章太后を宋に送歸すべし。

兩國の媾和已に成りしも、宋の學者軍人等多く之を喜ばず。軍人は曩の勝利によりて、河北恢復の難からざるを確信し、學者は當時に流行せし、宋學義理の説を固守して、君父の仇たる金と和すべからざるを主張す。秦檜もと和議を以て己の功となし、かば、力めて此等反對黨を抑制す。岳飛さきに反を以て誣られ、尋で張浚、韓世忠以下の諸將も亦皆其兵權を失ふ。檜は又文字の獄を起して、一言一句嫌忌に渉る者は、必ず之を貶竄して學者の口を塞ぐ。是より敢て戰を言ふ者なし、而して金も亦内訌漸く繁くして、南を圖る能はず。此等の事情よりして、南北相和して事なきもの殆、廿年に及べり。

第四章 媾和後に於ける金の形勢

旭古乃の篡立

金の熙宗即位以來國政に當る者先には粘没喝あり。後には兀朮ありて、國富み兵強かりしが、晩年に及んで酒を縱にし、屢皇族侍臣を手刃せしかば、從弟旭古乃之を弒して位を篡ふ。旭古乃も亦其性淫虐なりしも、豪傑を以て自から居り、内は國都を燕京に移して大に宮殿を營み、外は四方を征して天下を統一せんと欲し、先づ南して宋を侵す。是に於て兩國の和議復破る。(第一)遷都 金は其始興の按出虎水源の地を以て會寧府となし、諸帝皆斯に都せしが、旭古乃に至り、其地の僻幽にして、其俗の野鄙なるを厭ひ、都を燕京に移し、之を中都となし、大に宮殿を修め、華麗を極む。大定府を北京となし、遼陽府を東京となし、大

金の遷都

同府を西京となし、新に河南の汴京を南京となし、盛に宮殿を建て、以て他日の遷都に備ふ。

金の南侵

(第二)外征 金主旭古乃は高麗、西夏及宋を討滅して、一統の功を建てんことを念ふ。先づ南富庶の地を併さんと欲し、遂に約に背き、皇紀千八百廿一年自から六十万の大軍を帥ゐて南に下り、將に江を渡らんとせしが、會内亂起ると聞き、匆々軍を還へし、途にして其下の殺す所となる。

旭古乃弒逆を以て天下を篡ひ、意自から安せず。故に即位の初め、宗族二百餘人を誅殺し、其婦女を奪うて後宮に充てしかば、國人服せず。遷都南伐のこと起るに及んで、負擔の重きに苦しみ、皆亂を懷ふ。時に旭古乃の從弟烏祿東京を留守せしが、性仁孝にして衆心を得たり。旭古乃の南下を機とし、遼東に反して

金の世宗と孝宗との孝宗と

媾和後に於ける金の形勢

帝位に即く。之を世宗となす。南伐の兵をやめ、宋に故約を尋めんことを求む。

是時宋の高宗位を孝宗に禪る。孝宗は太祖七世の孫なり。賢明にして大志あり。金軍の北歸するに乗じて、陝西、河南、淮北の諸州を復し、更に張浚をして河北を圖らしめしが、其利なきに及んで始めて金の請に應じ、故約によらずして講和せんことを求む。世宗は戦争に意なきが故に、遂に其請を容れ、皇紀千八百廿五年新に左の條約を結ぶ。

第四回の講和事件

- (第一)兩國の境界は従前の如くなるべし、
- (第二)従來君臣の關係をやめ、宋は姪の叔父に對する禮を以て金に事ふべく、且宋の君主は皇帝と自稱することを得べし。
- (第三)従來の歲貢銀絹各廿五万を歲幣各廿万に減ずべし。

極盛

世宗已に南宋と和し、尋で北に向うて遼の遺族を撃つ。遼さきに滅亡せしと雖ども、其遺族の金に在る者往々恢復を圖り、廼古乃の南侵を機とし、臨潢に反する者ありしが、是に至りて平定す。世宗又西夏、高麗の亂を濟ふ。西夏王李乾順已に死し、其子仁孝嗣ぎて國亂る。世宗仁孝を助けて姦臣を誅戮せしむ。時に顯宗五世の孫、明宗高麗に王たり。其邊將叛き、四十餘城を以て金に降る。世宗納れず。高麗因つて叛將を誅するを得たり。二國是より深く金を徳とし、爾後八十餘年遂に金に背かず。是時に當りて金の疆域、東は日本海より、西は蒙古の西端に至り、南は漢、淮二水より、北は臚胸河に至り、實に東亞の最大強國たり。遷都以來金の國風漸く奢侈文弱に流る。世宗夙に後魏の孝文帝が、其國風を改めて遂に萎靡に陥りし故轍に鑑み、國人の漢

金の世宗國風を保守す

講和後に於ける金の形勢

姓を冒し、又支那の衣飾を著くるを禁じ、且一般の經史を女眞文字に譯出し、女眞の大學を建設し、力めて其國風を保守せしむ。實に金室中興の英主なり。
世宗は皇紀千八百四十九年を以て死し、孫章宗嗣ぐ。章宗即位の初、銳意治を圖り、國內太平なりしが、嬖臣胥持國事を用ゆるに及んで、國勢漸く振はず。宋之に乗じて中原を恢復せんと欲し、斯に復兩國の交戦を見るに至れり。

第五章 韓侂胄の專權

金の世宗死するの年、宋の孝宗も亦位を子光宗に禪る。光宗其皇后李氏の言に惑ひ、頗る禮を父皇に失ふ。是を以て群臣國人服せず。趙汝愚、韓侂胄と謀り、光宗の子寧宗を擁立して位に即

韓侂胄國政を擅にす

かしむ。汝愚相となり、大儒朱熹(晦)を任用す。侂胄も亦擁立の功を負ひしに、恩賞意に滿ざりしかば、深く汝愚を怨み、其外戚の故を以て、漸く寧宗の親幸を得るや、先づ構へて朱熹を逐ひ、汝愚を竄して國政を專にす。

朱熹及其學風

朱熹は皇紀千七百九十年を以て生る。其說二程(程頤)の學を祖述し、格物以て其知を致し、居敬以て其性を養ふべきを主張す。實に宋儒の泰斗たり。當時陸九淵(象山)は頓悟の說を以て聞え、陳亮(同父)は功利の學を以て聞えしも、朱熹最盛名ありて、門弟も亦最多し。朱熹一たび黜けらるゝに及んで、天下嚮然として朝政を非とし、侂胄を咎む。侂胄怒り、朱熹の門流を目して偽學徒となし、其官途の就職と、其著書の流布とを嚴禁す。時に皇紀千八百五十七年なり。

陸象山と陳同父と

韓侂胄已に宋の内政を專にし、又外征を起して大威權を立てんと欲す。金の章宗胥持國を任用してより國政亂れ、北方の塔々兒諸部叛きて、連年其邊境を擾すを機とし、皇紀千八百六十六年遂に盟に背きて金を伐つ。章宗逆擊して大に之を破り、勢に乗じて南下し、連に諸郡を陷る。宋人大に懼れ、侂胄を殺し、其首を金に送りて和を請ふ。皇紀千八百六十八年に至り、兩國の和議新に成る。其條件左の如し。

(第一)兩國の境界は従前の如し。

(第二)爾後宋は姪が伯父に對する禮を以て金に事ふべし。

(第三)歲幣を銀帛各卅万に増加すべし。

(第四)宋は別に犒師銀三百万兩を金に贈與すべし。

宋の金と和議を訂正するもの、斯に至りて凡そ五回、其媾和の

條件大略左表の如し、

年代	兩國の關係	宋より金に送る歲幣	兩國の境界
一七八〇	平等	絹十萬兩	直隸の東北一部を金に與へ、自餘の河北の地は宋に歸す
一七八六	伯父姪	全上	宋より河北の三鎮を金に讓與す
一八〇一	君臣	銀廿五萬兩	淮水を以て兩國の界となす
一八二五	叔父姪	絹廿萬兩	前約の如し
一八六八	伯父姪	銀卅萬兩	前約の如し

然れども是時蒙古は已に外蒙古に興起し、先づ金を伐つて河北の地を奪ひ、西夏を滅ぼして河西を併せ、又宋と兵を合せ金を夾撃して之を斃し、遂に宋を破りて悉く江南の地を收め、東方亞細亞を統一して、空前絶後の一大帝國を建設するに至れ

り。故に次篇に於て、此新興國たる蒙古を紹介すべし。

第三編 蒙古

第一章 蒙古の興起

幹難、怯魯連二河の水源なる、特(背)而不罕(背)山附近の地は、實に蒙古族の根據地なり。もと室韋の一部をなし、世々遼、金に羈屬せられしが、合不勒其部の長となるに及んで、撻懶の遺族を助けて金に抗す。兀朮屢之を征して勝たず。遂に和を講じ、合不勒を冊して蒙輔國王となす。時に皇紀千八百七年なり。其孫也速該に至り、頻に近傍の諸部を併せ、勢轉た強大となる。後塔々兒部の爲に殺され、部衆一旦分崩せしが、長子鐵木眞復義故を糾合し

合不勒蒙輔國王となる

也速該と鐵木

て、漸く國勢を挽回す。會塔々兒部金に叛く。鐵木眞塔々兒部と深怨あるを以て金を助け、功によりて察兀禿魯となる。招討使の謂なり。

當時蒙古部の東隣には、興安嶺に接して塔々兒部あり。其北貝加爾湖畔に沿うて泰赤烏部あり。其南は沙漠を阻て、長城に接して汪古部あり。其西薛靈格河の流域には蔑里吉部あり。蔑里吉部の南に克烈部あり。概蒙古と種族を同くす。蔑里吉、克烈兩部の西に當り、按臺山麓一帶には乃滿部あり。西方の一大強國にして其南は天山附近より、天山南路に散在せる畏吾兒(即回)部と相接す。蔑里吉部の北、貝加爾湖の西岸には幹亦刺部あり。幹亦刺部の西、乃滿部の北に當り也。里的石河の流域に吉里吉思部あり。乃滿部の西南、伊犁河の流域には哈刺魯部あり。

蒙古の興起時
代に於ける塞
外の形勢

克烈部の汪罕
と乃蠻部の太
陽罕と

鐵木真外蒙古
の諸部を統一
して成吉思汗
と稱す

鐵木真は此等の諸部を一統せんと欲し、先づ克烈部長汪罕と
同盟して蔑里吉部を破り、尋で泰赤烏部を下し、次に塔々兒部
を伐ち、蒙古の勢日に益強大を加ふ。已にして汪罕鐵木真を嫉
み、約に背きて之を襲ひしが、反つて大敗して國遂に亡ぶ。是に
於て蒙古は乃滿部と其境を接するに至りしかば、乃滿王太陽
罕大に恐れ、亦刺塔々兒、蔑里吉の諸部及克烈の餘衆等を誘
うて蒙古を伐ちしが、鐵木真之を杭海(即杭愛)山に逆撃して、太陽
罕を斃す。時に皇紀千八百六十四年なり。塔々兒部以下前後皆
蒙古の羈屬する所となり、内外蒙古の地殆、全く鐵木真の領土
となる。是に於て皇紀千八百六十六年、諸部の君長を幹難河源
に會して、大汗の位に即き、成吉思汗と號す。成吉思汗は皇紀千
八百十五年を以て生れしが故に、是時正に五十二歳なり。

蔑里吉部の脱
々々乃蠻部の
屈出律と

成吉思汗西夏
を伐つ

曩に乃滿の敗るゝや、太陽罕の子、屈出律は蔑里吉の部長、脱々
と共に、餘衆を率ゐ、也里石河上に奔りて恢復を圖り、勢漸く
強し。成吉思汗復撃ちて之を破る。脱々は死し、蔑里吉部の餘衆
は遠く阿拉海の西に奔り、屈出律は遁れて乃滿部の餘衆と共に
西遼に依る。是に於て按臺山附近の地は悉く蒙古に歸し、幹
亦刺部も亦來降す。成吉思汗乃其兵を南して西夏に逼る。
西夏は李仁孝の後、子純祐嗣ぎしが、仁孝の從弟李安全位を篡
りて之に代る。蒙古は此内難に乗じて屢、西夏を侵す。皇紀千八
百六十九年、安全遂に其女を納れて降を請ひ、尋で畏吾兒、哈刺
魯の二部も亦來歸して、天山附近より伊犁河流域一帯の地も
亦全く蒙古の有に歸せしかば、皇紀千八百七十一年、成吉思汗
は、其全力を擧げて金を撃つ。

成吉思汗金を
伐つ

成吉思汗復金
を伐ちて河北
の地を取る

時に金の章宗已に死し、其叔父永濟位に在りしも、柔弱にして將士服せず。成吉思汗之に乗じて西京を陥る。遼の遺族等も亦遼東に叛して蒙古に通ぜしかば、金の國勢益々蹙る。加之内亂起りて永濟は叛者の手に死し、章宗の庶兄宣宗繼ぎしが、蒙古は已に河東、河北、遼西の州郡を蹂躪して燕京に逼りしかば、宣宗遂に皇族の女及金帛を納れて和を請へり。時に皇紀千八百七十四年なり。

宣宗は蒙古と和せしも、燕京に安ずる能はずして、都を南汴京に遷し、かば、成吉思汗は其疑心あるを憤り、復南下して燕京を陥る。是に於て黄河以北の地殆ど全く蒙古に歸し、金は唯北と東とは河を阻て、西は潼關に頼りて其侵撃を防禦するのみ。

蒙古が金との攻戰暇なき間に、西遼に奔りし乃滿の屈出律は、

蒙古軍西遼に
向ふ

遂に西遼の王位を篡ひ、又哈刺魯部を破り、畏吾兒部を伐ち、頻に東に向うて蒙古の虚を構はんことを圖る。是に於て成吉思汗は、其將哲別を遣りて屈出律を撃たしむ。これ實に蒙古の大西征の導火にして、葱嶺以西の天地は、爲に空前の一大變動を現出するに至れり。

第二章 蒙古の西征以前に於ける中央亞細亞の形勢

大食の哈利發オスマンの後、百餘年を経て、皇紀千四百年代の初め、アルマンソル、哈利發たる時、始めて都を八吉打ハジダに奠む。其後嗣ハルン、アル、ラシッド論及マムンの時、頻に學術を獎勵し、文化頗る開けしも、國運反つて衰頽し、マムンの後、哈利發の威嚴

大食の哈利發
實權を失ふ

「サマン」家の
興亡

は漸く地に墜ち、所在の豪族は算端シュンブと稱し、哈利發の代理者として、其地方に於ける兵馬、政治の大權を握り、隱然獨立の姿をなし、哈利發は單に宗教上の虚位を擁するに至れり。
是時波斯の豪族「サマン」の曾孫に「イスマイル」あり、哈利發の爲に叛徒を征して、「サマン」家を興し、哈利發の代理者として、都を不フ花ハ刺チに奠め、北は天山の西麓より、南は波斯灣及印度の北境に至る地を擧げて、其版圖に歸せしが、皇紀千五百六十七年、「イスマイル」の死すると共に、「サマン」家の勢威頓に衰へ、畏吾兒及哈刺魯の諸部、之に乗じて中央亞細亞に侵入し、遂に「サマン」家を滅ぼす。

曩に回紇の黠戛斯に敗るゝや、其一部は河西に奔り、一部は高昌（吐魯番）に往く。河西の回紇は後西夏に臣服せしも、高昌の回紇

回紇勢を西域
に張る

は次第に勢を得て、地を西に開き、「ボグラ」汗其部長となるに及んで、別、喇薩軍（吹河の附近）に移り、哈刺魯部を率ゐて中央亞細亞を侵し、其後嗣「イレク」汗に至り、遂に「サマン」家を滅ぼし、此の如くして阿母河畔と天山の東端との間に於ける、大版圖を統領するに至れり。

突厥種族大食
國內に跋扈す

西突厥か一時中央亞細亞を領してより、殊に突厥が唐の爲に撃破せられしより、突厥種族の大食國內に來りて奴隸となる者多く、哈利發及算端等は、其武勇を愛して之を軍隊に用ゐしより、漸く權勢を得るに至れり。「サマン」家の奴隸に「セブク、テギン」なる者あり、「サマン」家の衰微に際し、哥疾寧（阿富汗地方、可不里の南）に據り、哥疾寧王家を興し、其子「マイムード」の時に至り、八吉打の哈利發の信任を得て算端を稱し、「サマン」家の領土を奪ひ、北は阿母

哥疾寧王家の
興起

蒙古の西征以前に於ける中央亞細亞の形勢

「マームード」
印度に侵入す

哥疾寧家の衰
微と「セルヂ
ユク」家の興
起と

河より南は波斯灣に至る領土を開き、皇紀千六百六十一年始
めて兵を印度に用ゆ。當時「ラヂャプト」種族西北、中三印度に彌蔓
して、幾多の小國を建て、相統一する所なかりしが、回教徒の侵
入するに及びて、團結して之に抵抗す。「マームード」は廿五年間
前後十七回の侵入によりて、南は「グセラト」より東は「カノーヂ」
に至る、印度河及恒河の流域を擧げて其領土となす。皇紀千六
百九十年「マームード」死するや、哥疾寧家の威勢俄然として衰
頹し、「セルヂユク」家「不花刺」に興りて、悉く其領土を奪ひ、代りて
中央亞細亞の一大勢力となる。

「セルヂユク」家の始祖を「セルヂユク」といふ。亦突厥種族に屬し、
不花刺附近に居る。哈刺魯及畏吾兒部の侵入によりて、中央亞
細亞の騷擾せるに乗じ、漸く領土を擴め、部落日に強し、其孫「ト

「アルフ、アル
スラン」
「ク、シヤ」

耶律大石「セ
ルヂユク」家
を破りて西遼
國を建つ

グルル」に至り、哥疾寧家を破りて呼羅珊の地をとり、都を「尼沙
不耳」に奠む。時に皇紀千六百九十七年なり。遂に其兵を西して
八吉打に至り、哈刺魯に命ぜられて回教保護者の稱號を襲ふ。
皇紀千七百廿年從子「アルフ、アルスラン」嗣ぎ、益地を西に開き、
小亞細亞に逼り、東羅馬の「ロマヌス」帝と兵を交へ、大に之を破
り、多額の歳幣を約して和を許せり。「アルフ、アルスラン」及子「メ
リック、シヤ」の治世は、實に「セルヂユク」家最盛の時代にして、其領
土は西阿刺比亞より東は葱嶺を越えて合失合兒に及びり。皇
紀千七百五十二年「メリック、シヤ」の死に莅みて、其領土を諸子及
諸將に分割せしより國運漸く傾く。

「メリック、シヤ」の子「サンヂヤル」算端たる時、遼の皇族耶律大石は
畏吾兒及哈刺魯兩部を率ゐて、中央亞細亞を侵す。「サンヂヤル」

屈出律西遼を滅ぼす

防戦して利あらず。悉く阿母河以北の地を失ふ。大石は天山南北兩路及中央亞細亞を併せて西遼國を建て、帝位に即く。之を德宗といふ。皇紀千七百九十六年を以て死し、子仁宗を経て孫直魯克に至る。是時乃滿の屈出律、蒙古に逐はれて西遼に依る。直魯克其女を以て之に妻はせしが、屈出律は西遼を築はんと欲し、花刺子摸王と通じ、遂に襲うて西遼を滅ぼせり。時に皇紀千八百七十一年なり。

花刺子摸の興起

さきに「マロクシヤ」の領土を分つや、突厥種族より出で、當時「セルゲユク」家の兵馬指揮官たりし「マシユテギン」は花刺子摸の地を得、其勢漸く強く、遂に獨立を圖る。算端「サンヂヤル」が耶律大石の爲に大敗して、「セルゲユク」王家の衰微せるに乗じ、「マシユテギン」の曾孫「イル、アルスラン」は西遼に歲幣を納れ、東顧

蒙古將哲別屈出律を斃す

の憂を絶ちて地を西に開く。其子「テキシユ」に至り、遂に「セルゲユク」家を滅ぼして波斯を一統し、哈利發を擁して西方亞細亞に號令せり。皇紀千八百六十年其子「ムハンマド」花刺子摸王となり、深く西遼に歲幣を納むるを辱ぢ、屈出律と東西相應して西遼を滅ぼし、西爾河以南の地を奪ふ。而して西爾河以外の西遼の領主は悉く屈出律に歸す。

屈出律已に西遼を築ひ、蒙古を伐ちて前敗に報せんと欲す。然れども彼は景教信者にして、回教を嚴禁せしかば、國人服せず。哲別の軍至りて其禁を解くに及んで、國人皆蒙古に降り、屈出律は巴達哈傷に逃れて殺さる。時に皇紀千八百七十八年なり。是に於て蒙古は直に花刺子摸と邊境を接するに至れり。

第三章 成吉思汗の遠征

成吉思汗の遠征

花刺子摸王
「ムハメド」

花刺子摸王「ムハメド」已に西遼を破りて中央亞細亞を併せ、又南「ゴール」家を伐つて阿富汗斯坦を略す。「マームード」の死後、哥疾寧家衰頹し、僅に興都克士山南の根據地を固守せしが、皇紀千八百十二年、阿富汗人「シハブ、ウヂン」なる者「ゴール」(「ヘラ」東)に興り、哥疾寧家に代りて阿富汗斯坦及北印度を領し、皇紀千八百五十一年、更に兵を出して中印度を併せんとす。時に印度の「ラヂャプト」種族は相和せず、「デルヒ」王と「カノーヂ」王とは、其勢威を争うに餘念あるなし。「シハブ、ウヂン」之れを機とし、「デルヒ」「カノーヂ」の兩王を降し、地を開きて「ベナーレス」に至り、時に或は兵を恒河の河口に進めたり。皇紀千八百六十六年、「シハブ、ウヂン」死し、「ゴール」家の騷擾せるに乗じ、「ムハメド」は直に阿富汗斯坦に入り、皇紀千八百七十五年全く其地を平定す。而し

「ゴール」家の
興亡

印度の奴隸王
家

て印度の方面は「シハブ、ウヂン」の死と共に、其部下の將帥にて、當時印度總督たりし「クダブ、ウヂン」は、「デルヒ」に據りて印度王と稱し、賓都耶山以北の地を領せり。「クダブ、ウヂン」はもと突厥種族にして、「ゴール」家の奴隸たりしが故に、之を奴隸王家といふ。

花刺子摸王八
吉打の哈利發
と争ふ

花刺子摸王「ムハメド」已に意を東に得、今や西に向ひ八吉打の哈利發を廢立して、大威權を立んとす。時に「マムン」より廿七傳して、「ナシル」八吉打の哈利發たり。英資ありて哈利發の權勢を恢復せんと欲し、竊に「ゴール」家と通じて、花刺子摸の權勢を殺がんことを圖る。「ムハメド」の「ゴール」家を滅ぼすや、其證跡を得て大に怒り、皇紀千八百七十七年八吉打に向ひしが、大雪に遭ひ功なくして還る。

蒙古と花刺子
摸の交戦の原
因

花刺子摸の國
勢

蒙古の花刺子摸と境を接してより、蒙古の隊商百餘人花刺子摸に往く。詭打刺(西爾河中流)の城主之を殺して其財貨を掠む。成吉思汗使者を發して其罪を詰問せしに、又殺されしかば、成吉思汗太に怒り、宿將木華黎に金の征伐を委ね、皇紀千八百七十八年自から大軍を帥る。其四皇子朮赤、察合臺、阿窩臺、拖雷と共に西に向ひ、也里的石河源の地より、阿力麻里(伊犁曲城の附近)を經、忽章河(西爾)を渡りて花刺子摸に侵入す。

花刺子摸王ムハメドは八吉打遠征に失敗してより、兵氣已に沮喪し、且其母后ツルカン可敦は、當時阿拉海の東北岸一帶に棲息せし、突厥種族の一なる、康里部の人にて、花刺子摸の將士は大抵康里より出でしが故に、此等の將士はツルカンの勢威を戴き、專横にしてムハメドの命令を奉せず。花刺子摸の國勢

「ムハメド」
の寶死

札蘭丁「デル
ヒ」に奔る

方に此の如し、到底蒙古に敵すべからず。ムハメドは其部將をして國都尋思干を固守せしめ、身は呼羅珊地方に遁る。成吉思汗は沿道の諸城を陥れて尋思干を圍み、別に速不臺、哲別の二將をして「ムハメド」を躡せしむ。ムハメド窮蹙して裏海島中に寶死せり。時に皇紀千八百八十年なり。

「ムハメド」の長子に札蘭丁あり。蒙古兵の尋思干に逼るに及んで、哥疾寧に退き、兵を募りて北に出で、蒙古の將忽都忽を八魯灣に破る。時に成吉思汗已に尋思干を陥れ、中央亞細亞を平定せしが、此報を得、急行して札蘭丁を撃つ。札蘭丁哥疾寧を棄て、信度河(即印)をこえて「デルヒ」に奔り、「クダブ、ウ、チン」の孫アルタムシに依る。成吉思汗其將八刺をして之を追はしめ、「ムトルタ」を陥れしが、暑氣甚しきを以て兵を罷め、皇紀千八百八十四

年師を收めて東に還る。

速不台、哲別の二將は、曩に、ムハメドを追うて裏海に至り、更に其西岸に沿ひ、太和嶺(高加索山)を踰えて、當時西伯利亞の西南部に散居せし、突厥種族の一なる、欽察部を襲ふ。蓋、其曾て蔑里吉部の逃亡を納れしを以てなり。欽察部援を阿羅思(即魯西亞)の諸侯に仰ぐ。幾富の太公密赤思老以下、南方阿羅思の諸侯王之に應援せしが、蒙古兵は其連合軍を阿速海附近の阿里吉河畔に逆撃して、大に之を破る。時に皇紀千八百八十四年なり。會、成吉思汗東歸の報に接し、大に阿羅思の東南部を掠奪して還る。

鐵木眞が成吉思汗と號してより、僅に廿年を出でずして、内外蒙古、滿州、支那の北半部、天山南北兩路、中央亞細亞及西北兩亞細亞の一部を擧げて、悉く其版圖に歸せり。蒙古が此の如き大

哲別速不台阿羅思の諸侯を破る

「クリルタイ」の組織

蒙古の騎兵

成功を奏せし主要なる原因は、大畧次の如し。

(第一)蒙古の諸王族、諸將及蒙古所屬の諸部の酋長、諸國の君王等によりて組織せる「クリルタイ」と稱する大會の推戴を経るに非ざれば、何人も蒙古の大汗たるを得ず。故に蒙古の大汗は常に全國に重望あり、且、概ね大器量ある者に限る。

(第二)蒙古人は幼時より、狩獵に莅みて騎射を習ふが故に、其騎兵は尤精銳なり。此等の騎兵は一人毎に乗馬三四頭以上を伴ふが故に、彼此交代して終日馳聘するを得。

(第三)此等の騎兵は行軍急を要する時は、馬乳及其乾酪のみを食とし、時には其乘馬に刺絡し、馬血を吸うて飢に充て、能く旬日を支ふるが故に、其進行頗る迅速なり。

(第四)軍隊の組織は十を以て遞進し、十人を一組として其長を

蒙古の軍隊組織

成吉思汗の遺征

十戸といふ。其上に百戸ありて十戸十人を統べ、千戸又其上に在りて百戸十人を統べ、千戸の上には万戸あり。万戸は大汗に直隸す。此等大小の部長は、其部下に對して無限の權力を有し、部下は如何なる事情ありとも、其上長官に違背すべからず。此規定に従はざる者は、貴賤の別なく必ず嚴罰を受く。
〔第五〕蒙古兵は出陣の間と雖ども、納税の義務を免るゝことなし。其妻は家を守りて此負擔を果すが故に、頻年兵を用ゆるも、財源欠乏すること少なし。

第四章 西夏及金の滅亡と拔都の西征と

西夏は從來金に臣服せしが、蒙古來侵の時、金が援兵を出さざりしを怨み、遂に金の西邊を侵す。金は已に蒙古に敗れ、又西夏

の叛あり。宋之を機とし約に背きて歳幣を納れず。蒙古西に往き、邊警稍緩なるに及んで、金の宣宗は地を南に開きて、北邊の失を償はんと欲し、歳幣を納れざるを名として宋を侵す。宣宗死し子哀宗嗣ぎ、和を宋に請ひ、且、西夏と約して兄弟の國となり、各兵を罷めたり。時に皇紀千八百八十三年なり。
西夏は金と和せしと雖ども、連年の攻戰によりて、國力頗る疲弊せり。是時蒙古の成吉思汗正に西征より還りて西夏を伐つ。時に李乾順の曾孫德旺西夏に王たりしが、憂悸して死し、其従子李睨遂に國を擧げて蒙古に降る。時に皇紀千八百八十七年なり。西夏は李元昊より凡そ百九十年にして亡ぶ。
成吉思汗は西夏を滅ぼし、年更に西方より金を侵さんと欲し、六盤山〔甘肅省鞏昌府附近〕に至りて死す。時に年七十三、之を太祖とな

成吉思汗の死
亡と阿窩臺の死
即位と

七二

す。蒙古の諸王諸將等、クリルタイを開き、太祖の第三子阿窩臺を擁して蒙古の大汗とす。即太宗なり。太宗始めて都を杭愛山下の喀喇和林に奠む。時に皇紀千八百八十九年なり。是時に當りて陝西、山東概、皆蒙古に没し、金は僅に河南の地を保つ。太宗は太祖の遺志を継ぎ、其弟拖雷をして漢中より漢水に沿うて東せしめ、自から河中(山西省蒲州府)より河を渡りて汴京に逼る。金の哀宗は腹背敵を受け、汴京を棄て、蔡州(河南省汝寧府)に奔る。

蒙古と宋と金を
夾撃して之を
滅ぼす

さきに金の南侵するや、宋は好を蒙古に通ぜしが、是に至りて蒙古は使を宋に遣して、金を夾撃せんことを議し、事成らば河南の地を割くを約す。時に宋の寧宗已に死し、太祖十世の孫理宗位に在り。孟珙孟珙をやり、蒙古軍と合して蔡州を陥れ、金を滅ぼす。

蒙古と宋と交
戦の原因

す。時に皇紀千八百九十四年なり。金は帝を稱する百廿年にして亡ぶ。

宋は是機に乗じて中原を恢復せんと欲し、急に兵を發して汴京、洛陽に入り、蒙古の守兵を逐ふ。太宗宋の盟に背くを怒り、其子濶端濶端をして諸將を率ゐて宋を伐たしむ。蒙古の軍直に江淮に逼り、又漢中より四川に入る。宋將孟珙、杜杲等防禦に力むと雖ども、州郡次第に蒙古に陥り、邊境日に蹙る。

蒙古の金を伐つや、遼の遺族等其騷擾を利し、遼東に據り、國を大遼と號し、高麗を侵す。時に明宗の孫、高宗高麗に王たり。明宗の晩年より崔忠獻なる者國家の大權を握り、高宗の世には其子崔躡崔躡代りて國政を統べ、威福を縦にせしかば、國民離畔し、大遼の入寇するに及て、北邊悉く没落す。會、蒙古の部將哈眞哈眞遼東

に來り、高麗を助けて大遼を滅ぼす。時に皇紀千八百七十八年なり。高麗是より蒙古に従ふ。已にして蒙古の使者を害せしかば、太宗大に怒り、皇紀千八百九十一年撒里塔をやり、高麗を伐ちて京城を陥る。高宗江華島に遁れて其鋒を避けしが、皇紀千九百一年に至り、遂に其王子を質として降を乞へり。

太宗は太祖の遺志を継ぎ、夙に西方を經略せんと欲し、即位の初年肖乃臺等をして欽察地方に向はしめしが、今や高麗を破り、金を滅ぼし、東方稍事なきに及んで、皇紀千八百九十六年朮赤の子拔都に命じ、五十万の大軍を帥み、阿羅思を征伐せしむ。太宗の子貴由、拖雷の子蒙哥、拔都の兄斡耳朮以下之に従ひ、速不臺其先鋒たり。按臺山麓に沿ひ、也爾的石河源を過ぎ、吉利吉思荒原を経て、沿道の諸部を降し、皇紀千八百九十七年遂に阿

羅思に入り、北に向うて烈野贊を屠り、「モスカウ」を陥れ、更に南に下りて幾富を取る。已に阿羅思を蹂躪し終り、其餘勢を駈りて歐洲の内地に逼り、一軍は馬扎兒(今の匈)より禿納河を濟り、一軍は孛烈兒(今の波)より「シレジア」を侵し、到る所殺掠を恣にす。是に於て歐洲北部の諸侯王等連合して、蒙古兵を「リーグニツ」に逆撃せしが、反つて敗亡す。實に皇紀千九百一年なり。歐洲全土震動し、捏迷思(今の獨逸)の諸都民皆荷擔して去る。會、太宗死去の訃音到り、蒙古の軍東に還る。

第五章 蒙古の南方經畧及旭烈兀の西征

太宗は皇紀千九百一年を以て死し、長子貴由歐洲より歸り、皇紀千九百五年遂に「クリルタイ」に推されて、蒙古の大汗となる

太宗の子孫と
拖雷の子孫と
大汗の位を争ふ

蒙古大理國を
降す

之を定宗となす。在位三年にて死し、皇后海迷失及太宗の一族等、太宗の孫にて定宗の從子なる、失烈門を立てんと謀りしが、皇紀千九百十一年に至り、拖雷の子蒙哥は、クリルタイに推されて大汗の位に即く。之を憲宗となす。是に於て失烈門及其兄弟皆平ならず。憲宗は其不平黨の主領を殺戮し、太宗の子にて失烈門の叔父なる濶端、太宗の孫にて失烈門の從弟なる海都等を、阿爾泰山附近の邊地に移し、其喀喇和林に留るを許さず。是より太宗の子孫と拖雷の子孫とは、永く怨敵となり。遂に蒙古大汗國分裂の原因をなす。憲宗即位の初年、皇弟忽必烈をして、漠南軍國の事を總理せしむ。忽必烈先づ四川より雲南に入て大理國を伐つ。大理は即唐の南詔にして、唐末酋龍の死後、國勢頓に衰へて復邊に寇せず。

喇嘛教の起源

拏底達と拔思巴と

支那も亦騷亂相踵ぎ、宋興ては西北に事多かりしを以て、久く大理と通ぜざりしが、是に至て大理國王段智興蒙古に降る。時に皇紀千九百十三年なり。忽必烈更に軍を進めて吐蕃に入る。吐蕃の始祖、棄宗弄贊以來、歴代佛法を崇奉せしが、皇紀千四百七年、北印度烏菴の僧、巴特瑪撒巴々吐蕃に來りて、其國俗に適應せる一種の密教を唱ふ。之を喇嘛教の祖師となす。喇嘛とは無上の義にして、高僧を指すなり。爾來喇嘛教の傳播盛なるに従ひ、喇嘛の勢威時に國王を凌ぐ者ありければ、皇紀千五百六十年、朗達爾瑪吐蕃王となるや、之が抑壓を試みしに、反つて弒に遇ひ、其後嗣は皆喇嘛教を崇信せしかば、喇嘛は益其勢力を増進し、皇紀千九百年の頃には、喇嘛拏底達の威令吐蕃全土に行はる。忽必烈吐蕃に入るに及んで、拏底達と和し、其從子拔思

巴を伴ひ還りて之を寵用し、後蒙古の大汗となるや、拔思巴を帝師に拜し、吐蕃全土を統領せしめたり。忽必烈已に大理、吐蕃を定め、速不臺の子兀良合台をして、自餘の西南夷を平げしむ。兀良合臺雲南より東して交趾を侵す。交趾は李乾徳の時、宋と和して後、國威漸く衰ふ。乾徳より三傳して李龍翰に至り、内亂あり。陳李之を平げ、功を以て國政を專にす。龍翰の子李旦立ち、位を其女佛金に傳ふ。佛金陳李の孫喫に尙し、遂に王位を禪る。是に於て陳氏李氏に代りて交趾の王となる。時に皇紀千八百八十五年なり。陳喫位に即きてより、外は占城を破り、宋の南境を侵し、内は制度を改革し、國大に治まる。兀良合台來寇するに及んで、防戦して利あらず。遂に歲幣を納れて蒙古と和す。時に皇紀千九百十八年なり。

蒙古交趾を降す

旭烈兀の西征

旭烈兀木乃奚を滅ぼし八吉打を陥る

蒙古の太祖東歸してより、中央亞細亞の地漸く穩ならず。花刺子摸の王子札蘭丁さきに印度に竄れしが、デルヒ王朝の援兵を得、故土に歸て恢復を圖る。皇紀千八百九十年太宗拜受等をや、札蘭丁を撃ちて之を殺し、回教徒は猶往々叛亂を企てしかば、皇紀千九百十四年憲宗は皇弟旭烈兀をして、西方の叛亂を討平せしむ。旭烈兀は喀喇和林より天山の北麓に沿ひ、阿力麻里を経、阿母河畔の柯提に到り、西域の諸侯王を招致し、其軍を併せて木乃奚國を伐つ。木乃奚は裏海の南、エルブルツ山邊に蟠踞せし、一種の回教徒にして、兇悍獍猛、久しく蒙古の累をなせり。旭烈兀其都城を摧破し、兵を進めて八吉打に逼り、皇紀千九百十八年遂に哈利發、モスタシムを降す。モスタシムは「ナシル」の曾孫なり。然れども「モスタシム」の一族密昔兒（埃及）に

遁れて、哈利發を稱せしかば、旭烈兀は郭侃等をして、印度の怯失迷兒地方を平定せしめ、自から大軍を率ゐて西に進み、シリヤを降し、的迷失吉を陥れ、天方(阿刺比亞)を略し、將に密昔兒の回教徒を殲さんと志せしが、會、憲宗死せしを以て、西征の軍を收む。

第六章 世祖の即位と宋の滅亡と

大理、吐蕃交趾已に蒙古に降りしかば、憲宗は大舉して宋を滅ぼさんと欲し、皇弟阿里不哥をして、喀喇和林を留守せしめ、皇紀千九百十八年自から將として南に下り、四川の諸城を下して、遂に合州(四川重慶府)を圍む。忽必烈は別に河南より江を渡りて、鄂州(湖北武昌府)を圍み、兀良哈台は交趾より北上して潭州(湖南長沙府)を侵す。時に宋の理宗猶位に在り、賈似道をして蒙古を防がし

蒙古三道より宋を侵す

忽必烈の即位

阿里不哥と忽必烈との争位

蒙古の分裂の由来

む。似道鄂州に至り、密使を忽必烈に送り、臣と稱し幣を納めて和せんことを請ふ。時に憲宗已に合州に死し、阿里不哥竊に蒙古の大汗たらんと志し、忽必烈方に後顧の患あるを以て、江北の地と歳幣銀絹各廿万を納むるを命じて、和を賈似道に許し、匆々軍を收めて北に還り、開平(内蒙古多倫諾爾の北)に至り、部下の諸王及諸將の勸進により、正當なる、クリルタイを待たずして蒙古の大汗となる。之を世祖となす。實に皇紀千九百廿年なり。

憲宗の死するや、阿里不哥は喀喇和林に在りて、別に、クリルタイを開き、大汗を稱し、憲宗の諸子及定宗、察合臺の子孫の漠北に在る者皆之に従ふ。是に於て皇紀千九百廿一年世祖自から將として阿里不哥を撃破す。阿里不哥窮蹙し、皇紀千九百廿四年遂に憲宗の諸子と共に世祖に降る。然れども從來憲宗の一

世祖の即位と宋の滅亡と

族に怨ある定宗の一族は、世祖の即位が蒙古の習慣に違背せるを口實として、臣禮を執らず。此の如くして蒙古分裂の基漸く成る。

世祖已に阿里不哥を降し、新に都を燕京に奠めて、之を大都と名づけ、開平を上都となし、又國號を立て、元といふ。時に皇紀千九百卅一年なり。

さきに賈似道の蒙古と和して還るや、深く臣と稱し幣を納むることを懸す。故に理宗其功を賞し、寵遇比なく、權威朝を傾く。世祖位に即くに及んで、使者を發して前約を徵せしに、皆似道の囚ふる所となりしかば、世祖大に怒り、阿里不哥降服の後、伯顔をして大舉南侵せしむ。伯顔は漢陽、鄂州を降し、宋の國都杭州に逼る。時に理宗の後、度宗を経て、恭帝正に位に在り。賈似道

國號を立て、元といふ

宋の滅亡

を退け、勤王の兵を徵す。文天祥、張世傑等所在兵を起して入衛せしが皆敗れ、恭帝遂に元に降る。實に皇紀千九百卅五年なり。宋は建國より三百十六年にして亡ぶ。

宋の遺臣等恭帝の兄端宗を奉つて福州に據り、恢復を圖りしが、亦頻に元軍に敗られ、海上廣州に奔る。端宗尋で死し、宋の遺臣等更に其弟帝昺を崖山(廣東省廣州府新會縣南)に立てしが、元將張弘範等南侵し、遂に崖山を陥れ、帝昺海に没す。時に皇紀千九百卅九年なり。

第七章 元初に於ける蒙古の狀躰

鐵木眞が蒙古の大汗となりしより、其孫世祖が宋を滅ぼすに至るまで、僅々七十年の間に於て、蒙古は實に空前絶後の一大

元初に於ける蒙古の狀躰

帝國を建設せり。今其領土膨脹の次第を示せば、大畧左表の如し。

大汗	其時代に征服せし土地
太祖鐵木眞	内外蒙古、滿洲、支那の西北部、天山南北兩路、中央亞細亞、阿富汗斯坦、波斯の東半部及高加索附近
太宗阿窩臺	支那の中央部、朝鮮、西伯利亞の西南部、歐洲の東北部
憲宗蒙哥	支那の西南部、圖伯特、交趾、西方亞細亞一帶及印度の西北小部
世祖忽必烈	支那の南半部

是故に世祖の初年に於ける蒙古の領土は、北方亞細亞の北部と、南方亞細亞の南部とを除き、亞細亞大陸を横貫して歐洲に跨る。而して蒙古の諸王族は、は大帝國內に皆幾分の私領を有す。就中左の四部尤大なり。

元初に於ける蒙古の版圖

(第一)伊兒汗國 旭烈兀の子孫是に君臨し、阿母河以外の西方亞細亞一帶の地を領し、「マラグア」(ウルミヤ湖の東)を國都とす。

(第二)欽察汗國 伊兒汗國の北に位し、東は吉利吉思荒原より、西は歐洲匈牙利の國境に至り、禿納下流の地、高加索以北の地を擧げて其版圖に列す。拔都の子孫斯に君臨し、或は之を金黨汗國といふ。亦的勒(今のウラガ)下流の薩來を國都とす。

(第三)察合臺汗國 察合臺の子孫斯に君臨し、西爾河外天山附近一帶の西遼の故土を領す。其國都は阿力麻里なり。

(第四)阿窩臺汗國 阿窩臺の子孫斯に君臨し、阿爾泰山附近の乃滿の故土を領し、也迷里(エミル河岸)附近を根據地とす。

世祖は蒙古の大汗として、滿州、内外蒙古、支那本部、青海、圖伯特及中央亞細亞を直領し、且高麗、交趾を羈縻するのみならず、又

元初に於ける蒙古の版圖

名義上此等の四汗國を統御せざるべからず。蒙古大帝國の全權は世祖の掌中に在り。世祖は此大帝國を管理せんが爲に、阿母河行省を建て、葱嶺以西を統べ、嶺北行省を置きて、杭海山以北を制し、阿力麻里元帥府を開きて、天山北路を監し、別失八里元帥府を設けて、天山南路を制し、遼陽行省を設けて、滿州及朝鮮を督せしめたり。

空前絶後の一大帝國の現出して、所在に割據せし幾多の小國全く滅亡せしが故に、彼此商賈の往來自由となりしと、且又この大帝國には、政治上及軍事上の目的を以て、新に官道を開き、宿驛を設け、守備隊を配置せられしが故に、大に旅客の危険困難を減少せしと、此二大原因よりして、東西兩洋の交通は其面目を一新し、西方亞細亞及歐洲の商人は、陸路中央亞細亞より

天山南路を経て、若くは西伯利亞の南部より天山北路を経て、遠く其販路を哈喇和林、燕京に開き、而して波斯、印度と支那との間に於ける海上の交通も亦、頗に頻繁を加へ、江南なる泉州、福州の諸港は、當時世界第一の貿易場となり、外國人の來りて其地に住居する者、或は万を以て數ふ。かの以太利の「マルコ・ポーロ」及び亞非利加の「イブン・バトゥータ」等が、支那に遠遊を試みしは、實に蒙古時代にして、我日本の國名の始めて、西方に知られしも亦此時代に屬す。加之蒙古の大汗は、人種の異同を問はず、才能ある者を登庸せしが故に、阿刺比亞、波斯地方の學者、軍人、以太利、佛蘭西の畫家、職工等の來りて、其朝に仕ふる者頗る多く、是の如くして、西方の天文、數學、砲術等は、支那に輸入せられ、支那の羅針盤、活版術等は、西方に將來せられたり。

東西の交通頻繁を加ふるに従ひ、耶蘇教徒の東方に布教を企
つる者も亦漸く多し。抑、耶蘇教徒はさきに拔都の西征により
て、一大恐慌を起し、と雖ども、當時歐洲一般に回教徒撲滅の
氣焰盛にして、佛蘭西獨逸の諸侯王は、方に十字軍を再興せし
が故に、彼等は寧ろ勇敢なる蒙古と同盟して、回教徒を壓倒せ
んと欲し、皇紀千九百五年羅馬法王、インノーセント四世は、柏
朗嘉賓を定宗の王庭に遣り、尋で皇紀千九百十三年、佛蘭西王
ルイ九世も亦使僧羅柏魯をして、遠く憲宗を喀喇和林に訪は
しめたり。

蒙古は其建國以來の方針として、一般に宗教の自由を許せり。
加之回教國を併呑せんには、遠交近攻の政策により、歐洲の耶
蘇教國と親和するの必要を知りしが故に、蒙古の大汗、殊に世

祖は尤、耶蘇教徒を厚遇せり。是を以て皇紀千九百五十四年、モ
ンテコルヴァンは、羅馬法王の教書を齎らして海路支那に來り、
世祖の許可を得、初めて羅馬派の教會を燕京に建設す。爾來幾
多の耶蘇教徒支那に來りしが、元亡び明興るに及びて、東西の
交通やむと共に、耶蘇教も亦次第に廢絶に歸せり。

第四篇 元及明初

第一章 世祖の内治外征

蒙古はもと北狄より起りしが故に、官制、法度備らず。太祖、太宗
の際、耶律楚材を任用して、やゝ法制を定めしと雖ども、憲宗の
世を終るまでは、外國の侵略に忙はしく、未だ其力を内治に盡

元の官制

才能はざりしが、世祖は憲宗の時より、漠南の都督となり、漢人の學才ある者を招致して其幕賓となし、已に蒙古の大汗となるに及びて、漢人劉秉忠、許衡に命じ、新に官制を定めしむ。即中央政府には、中書省、樞密院、御史臺をおき、以て天下軍國の事を統ぶ。御史臺は黜陟を司どり、樞密院は兵柄を握り、中書省は政務を行ふ。而して此等の長官は皆蒙古人に限り、次官以下には漢人、畏吾兒人、康里人、波斯人等を任用せり。其他官吏登庸法、學制、稅制等も、大抵支那の舊制に參酌して、一代の制を定め、又蒙古には從來固有の文字なく、畏吾兒文字若くは漢字を借りて用を辨せしが、皇紀千九百廿九年に至り、世祖は喇嘛拔思巴に命じて、新に蒙古文字を定めしめたり。

然れども世祖の功業は内治よりも寧ろ外征に在り。從來蒙古

蒙古文字

世祖東南諸國を經營す

の外國經略は、主として西北の方面に限りしが故に、世祖は今や其兵を東南に向け、祖先の遺業を恢にせんと欲し、高麗、日本、交趾、占城、緬及南洋侵略の軍を起せり。

高麗と元との關係

(第一)我國及高麗との關係 太宗の時一旦高麗を征服せしも、其後叛服常なかりしが、憲宗の末年に至り、高麗の明宗復蒙古に降り、其太子を質とす。明宗死するに及んで、太子世祖の後援により、歸りて高麗王となる。之を元宗となす。已にして權臣林衍之を廢せしかば、世祖兵を遣りて罪を問ひ、慈悲嶺以西の地を收めて蒙古の領土となし、遂に元宗を位に復す。時に皇紀千九百廿八年なり。元宗死し子忠烈王立つに及んで、世祖其皇女を以て之に妻はす。高麗是より全く蒙古の外藩となる。

世祖已に高麗を服し、其王を介して我國を招致せんと欲す。時

蒙古再び寇して大敗す

に北條時宗鎌倉の執權たり。唐末使聘を絶ちしより、五代、宋の間、唯僧侶商賈の私に渡航するの外、久しく支那と國際上の交通を絶ちしと、且蒙古の書辭の無禮なりしを以て、之を退け、其使者を斬る。世祖大に怒り、皇紀千九百卅四年忻都を將とし、壹岐、對馬に寇せしが、功なくして還る。已にして其宋を滅ぼし、勢に乗じ、前敗に報せんと欲し、阿剌罕、范文虎を將とし、高麗の兵を併せ、全軍十四万人、戰艦四千五百艘、我九州を侵し、颶風の爲に復大敗して還る。實に皇紀千九百四十一年なり。世祖再舉を志し、も南方の經略に暇なくして、其事遂に罷みたり。

(第二) 緬國との關係 蒙古さきに大理國を下し、雲南の地を定むるや、其西南境は直に緬國に接す。緬は即今の緬甸なり。緬王は當時蒲甘に都し、阿羅漢及白古を併せ、暹國(暹羅の一部)を略して、

元の世祖緬國を伐つ

勢を後印度に振ふ。世祖使をやり、其朝貢を促せしも、命に應ぜざりしかば、皇紀千九百三十七年、元將納速丁ナハツチン之を伐ちしが、暑氣甚しきを以て一旦軍を還へし。皇紀千九百四十三年、元の王族相吾答兒は更に緬を征し、伊羅瓦底河に沿うて緬に入り、江頭太公を取り、流を下りて國都を陷る。緬王は南白古に遁れ、更に錫崙に航行せんとせしが、會、元軍糧食竭きて去りしかば、緬王國都に歸り、降を蒙古に請ひ、歲貢を納む。緬の降服と共に、圖伯特の東南端より、阿撒母地方に散在せし、金齒以下の諸蠻部及暹國も亦、前後相繼ぎて元に入貢するに至れり。

(第三) 交趾及占城との關係 交趾の南に占城國あり。即古の占婆國にして、今の交趾支那の地に當る。世祖已に交趾を降し、又占城を招致せしが、命を拒みしかば、皇紀千九百四十二年、唆都

元の脱歡交趾
を征す

をして海軍を率ゐて之を伐たしめ、後二年更に皇子脱歡をして陸軍に將とし、唆都に應援せしむ。脱歡途を交趾に借る。時に陳瑛の孫、吟交趾に王たり。元の要求を聽かず。脱歡乃先づ交趾を侵す。唆都も亦占城より來り會す。陳吟防戦して利あらず。已にして元の軍中疫作る。交趾の兵之に乗せしかば、元軍大敗し、唆都以下戦死頗る多し。世祖大に怒り、皇紀千九百四十七年復脱歡をやり交趾を征す。脱歡遂に其國都交都を陥れしも、暑氣に苦しみて歸途に就く。交趾の兵追撃して大に之を破りしが、幾ならずして陳吟元に入貢して其罪を謝し、占城も亦尋で來降せり。

(第四)南洋諸國との關係 世祖は占城交趾を征討すると同時に、又使者を發して南洋諸國を招致せしむ。是に於て皇紀千九

元の國威南洋
に遍ねし

百四十二年以來、馬八兒(南印度の東岸)來々(即羅揭今の暹羅の南部)蘇木都刺以下の諸國、前後皆元に入貢せしが、獨り瓜哇命を聽かさりしかば、皇紀千九百五十三年兵三萬をやりて、之を擊破せしめたり。是より元の國威南洋に遍ねし。

第二章 海都汗の叛亂

世祖が東南の經營に餘念なき間に、其西北方に一大變興りて、遂に蒙古大帝國の分裂を促すに至れり。即海都汗の叛亂是なり。初め憲宗蒙古の大汗となりしより、太宗の子孫たる阿窩臺汗國の諸王等常に不平を抱く。太宗の孫海都汗實に其主領たり。世祖の位に即くや、不平勃々たる阿窩臺汗國の諸王は、皆其即位を否認して、阿里不哥を助けしが、阿里不哥敗亡の後、海都

海都汗

汗は也迷里に退きて兵力を養ひ、皇紀千九百廿五年世祖が南、宋との攻争に暇なきを機とし、遂に自から蒙古の大汗たるへきを主張せり。

察合臺汗國の形勢

阿窩臺汗國の西隣は即察合臺汗國なり。察合臺汗國の始祖察合臺は、皇紀千九百一年を以て死し、其孫哈刺旭烈嗣ぎしが、定宗之を退け、哈喇旭烈の叔父也速蒙哥を命じて察合臺汗となす。幾ならずして憲宗蒙古の大汗となり、哈喇旭烈の寡婦オルガナをして、察合臺汗國の主權を執らしむ。阿里不哥の世祖と争ふや、彼はオルガナを退け、哈喇旭烈の從弟アルグを察合臺汗となし、與に世祖に抗せしが、阿里不哥降り海都叛するに及んで、皇紀千九百廿五年、世祖は更に也速蒙哥の孫八刺を命じて察合臺汗となし、且拔都の孫忙哥帖木兒を欽察汗に命じ、以

忙哥帖木兒及八刺と海都との關係

海都汗蒙古の大汗となる

て海都を抑へんと欲す。然れども八刺もと海都と親交ありしかば、反つて彼に與し、西爾阿母兩河間の大汗直轄地を侵略す。是に於て蒙哥帖木兒兵を出して其後を絶つ。海都還りて之を防ぐ。八刺之を機とし、海都に背きて悉く侵略地を占有す。海都怒り和を欽察汗に請ひ、且其援兵を得て、八刺を破りしが、世祖の其釁に乗ずるを恐れ、遂に入刺と和す。是に於て皇紀千九百廿九年、欽察、阿窩臺、察合臺三汗國の諸王、怛邏斯河畔にクリルタイを開き、新に海都を推して蒙古の大汗となす。然れども阿母河以西には伊兒汗國あり。其始祖旭烈兀は世祖の親弟なるが故に、固より海都に従はず。是に於て海都は八刺と兵を合せ、伊兒汗國を侵して呼羅珊の地を劫掠す。欽察汗國の始祖拔都は皇紀千九百十五年を以て死し、二傳し

欽察汗と伊兒汗との關係

て其弟別兒哥に至る。熱心なる回教信者にして、屢歐洲の耶蘇教徒を苦めしかば、羅馬法王アレキサンダー四世は歐洲の諸君主に説き、十字軍の再興を企てしが、別兒哥の從孫ノガイは、欽察の兵に將とし、阿羅思の諸侯を帥る、波蘭土に侵入し、センドミルを陥れ、大に殺掠を恣にして還る。時に皇紀千九百十九年なり。別兒哥は又伊兒汗旭烈兀が、八吉打を陥れ、哈利發を俘とし、回教徒を虐待せしを怨む。時に旭烈兀は阿非利加の回教徒を征服せんとて、埃及の算端ヒバースと攻争す。ヒバースは別兒哥に説きて旭烈兀の後を襲はしむ。是に於て皇紀千九百廿二年、欽察の兵伊兒汗國に侵入せしも、功なくして還る。爾後この兩汗國長く怨敵となる。別兒哥死し、忙哥帖木兒嗣ぎ、尙屢伊兒汗と戦ひしが、是に至りて海都及八刺に黨せり。

伊兒汗阿八哈海都八刺の連合軍を破る

海都都哇と元に逼る

伊兒汗旭烈兀は皇紀千九百廿五年を以て死し、子阿八哈嗣ぎ、皇紀千九百廿九年大に海都、八刺の連合軍を破りしも、其西北邊は頻年欽察汗の侵略を受け、加之皇紀千九百四十二年阿八哈の死するや、其子阿魯渾は叔父「アイメド」と汗位を争ひ、是等内外の事情の爲め、遂に海都を拮据する能はず。海都は伊兒汗が東顧の暇なきに乗じて、其素志を逞くせんと欲し、八刺の死するや、其子都哇を命じて察合臺汗となし、其兵を併せて東に進み、哈刺火州(今の哈喇和卓吐魯番の附近)に至る。世祖乃、皇子耶木罕を將とし、憲宗の子昔里吉及木華黎の孫、安童等と與に之を防がしむ。昔里吉叛し、那木罕及安童を捕へて海都に應ず。世祖大に驚き、更に伯顔を遣りて敵軍を鄂爾坤河畔に破らしめしが、皇紀千九百四十七年、海都は又滿州地方の諸王を誘うて、

乃顔海都に應じて元を夾撃せんとす

世祖を夾撃せんとす。

曩に蒙古の諸王族を分封するや、太祖の諸弟、撻只、鐵木哥等の子孫は、滿州、吉林の地を領す。是に至りて、鐵木哥の曾孫、乃顔は一族の諸王と並び叛す。世祖先づ、伯顔を喀喇和林にやりて、海都を阻てしめ、自から將として、滿州地方の諸叛王の連合軍を遼河に破り、乃顔を擒にし、皇孫、鐵木耳を留めて、其餘黨を平定せしめ、身は喀喇和林に赴きて、海都を征せしが、海都戰はずして退去せしかば、伯顔を留めて北邊を鎮せしめ、遂に燕京に凱旋す。

皇紀千九百五十四年、世祖死し、鐵木耳、大汗となる。即元の成宗なり。世祖死してより、海都は屢邊を擾し、が、皇紀千九百六十年、阿窩臺、察合臺兩汗國の諸王を率ゐ、大舉して元に通る。時

海山海都を破る

に成宗の從子、海山は、伯顔に代りて、喀喇和林を守り、逆撃して大に之を破りしが、會、海都死せしを以て、兩汗國の諸王は皆引き還れり。

阿窩合汗國の滅亡

海都の子、察八兒は、都哇の後援によりて、阿窩臺汗國の主權を執る。海都の世祖と争を起してより、斯に四十年、阿窩臺、察合臺の兩汗國爲に頗、疲弊せしかば、皇紀千九百六十三年、都哇、察八兒に勸めて、與に成宗に降る。已にして、察八兒復異志を抱きしかば、都哇は之を撃破し、且、元に之を夾撃せんことを請ふ。時に成宗已に死し、海山嗣ぎて、武宗となる。武宗兵を遣りて、察八兒を也兒的、石河上に破る。察八兒窮蹙して、遂に武宗に降る。時に皇紀千九百六十八年なり。是に於て、阿窩臺汗國全く亡び、其地概、察合臺汗國に入り、西北邊始めて事なきを得たり。然れども

蒙古大汗國漸く分崩す

海都の叛後數十年間、欽察伊兒兩汗國と元朝との陸路の交通殆ど遮断せられ、今や幸に叛亂鎮定せしと雖ども、幾ならずして元朝は内亂相繼ぎ、國勢日に傾頽せしを以て、蒙古大汗國は次第に解體を免れざるに至れり。

第二章 元の衰微

世祖國庫を充實するを圖る

世祖地を東南に開き、又兵を西北に用ひ、連年戦争に従事せしかば、國用給せず。是に於て回教徒阿合馬特を登庸して、國庫の充實を計らしめ、尋で盧世榮、桑哥の輩も亦理財に長ずるを以て信任せらる。彼等は交鈔と稱する紙幣を濫發し、鹽、鐵、酤酒の税を増加し、或は外國貿易を官業となし、或は牧畜を官業となし、専ら貨殖を事とす。爲に一時の急を救ひ得たりしと雖ども、

元朝衰微の遠因

遂に元朝衰微の遠因を残せり。

成宗八百媳婦及緬國を征せんとす

世祖の死するや、諸王或は大統を覬覦する者ありしも、名將伯顔主として世祖の遺命を固守して、皇孫成宗を立つ。成宗の時緬國に内亂ありしかば、將をやりて之を靖めしむ。緬國の東北、雲南の西に八百媳婦の蠻あり。竊に緬國の叛者を助けしを以て、皇紀千九百六十年成宗劉深に命じて先、八百媳婦を撃たしめしむ。士卒烟瘴に苦しみて死亡する者十に七八、雲南、貴州地方の諸蠻部等、之に乗じて並び叛す。後僅に之を平定せしも、元軍の損失も亦甚しく、遂に征緬の軍を罷む。是より元の威勢漸く西南蠻に振はず。

蒙古の相續法

蒙古の相續法は、必しも父子の世襲を認めざるが故に、帝位繼承の際、常に篡奪の紛争を免れず。皇紀千九百六十七年成宗死

海山と愛育黎
拔力八達と

し、嗣子なきに及んで、皇后ト魯罕政を攝し、成宗の從弟阿難答を擁立せんとす。時に成宗の從子海山久しく北邊を鎮して重名あり。右丞相哈剌哈孫以下、之を迎へんと欲す。任地悠遠にして時日遅延するを恐れ、海山の弟愛育黎拔力八達を河南より招き、急に大都に來らしむ。八達大都に入りて、ト魯罕及阿難答等を殺し、姑く國を監せしが、幾ならずして海山喀喇和林より來りて位に即く。所謂武宗なり。武宗八達を皇太弟となして其勞に報ず。

武宗位に即きて大に喇嘛を尊崇し、且、權臣脫虎脫を信任して、頗る舊制を壞る。八達其後を承けて銳意弊政を除く。之を仁宗となす。時に武宗の子和世辣年已に長じ、他日當に仁宗の後を承くべし。丞相鐵木迭兒は帝の意を迎へ、之を讒し、出して雲南

和世辣察合臺
汗に依る

王となし、帝の長子碩德八剌を立て、太子となせしかば、武宗の舊臣等怒り、和世辣を奉じて叛を謀りしも、敗れて阿爾泰山邊に逃れ、遂に察合臺汗に依る。都哇の子也先不花正に察合臺汗たり。屢、元の西陲を擾して仁宗と不和なりしかば、歎んで和世辣を迎ふ。實に皇紀千九百七十六年なり。

鐵木迭兒の專
横

鐵木迭兒もと仁宗の生母に寵ありしが、是より又仁宗の信任を得、專横貪婪至らざるなし。仁宗死し、太子英宗立つに及んで、鐵木迭兒擁立の功を負ひ、暴虐益甚しかりしかば、帝漸く之を疎外し、専ら拜住に任ず。拜住銳意治を圖り、力めて鐵木迭兒の黨與を貶黜す。是に於て鐵木迭兒の義子鐵失は其黨與を率ゐて亂を起し、帝を弑し、拜住を殺し、成宗の從子也先鐵木兒を迎立す。之を泰定帝となす。時に皇紀千九百八十三年なり。泰定帝

燕帖木兒圖帖睦爾を擁立す

位に即きて悉く鐵失以下の叛黨を誅戮す。已にして帝上都に往きて死し、太子阿速吉八位に上都に即く。年甫めて九歳之を天順帝となす。

さきに武宗位を仁宗に傳ふ。仁宗の後、武宗の子孫當に大統を承くべし、和世辣一旦讒を以て漠北に遁れしより、其弟圖帖睦爾も亦江南に謫居せしが、泰定帝の上都に往くや、燕帖木兒をして大都を留守せしむ。燕帖木兒曾て武宗に恩ありしかば、泰定帝死し、嗣子年幼にして、天下武宗の子孫を懷ふを機とし、圖帖睦爾を大都に迎へ、兵を遣りて上都を攻む。天順帝出奔して終る所を知らず。是に於て圖帖睦爾は燕帖木兒と謀り、和世辣を迎へて帝位に即かしむ。之を明宗となす。明宗察合臺汗國より還り、上都に到りて暴に死す。蓋弒に遇へるなり。圖帖睦爾位

燕帖木兒及伯顔の專權

を嗣ぐ。所謂文宗なり。燕帖木兒大功あるを以て帝の信任を得、勢威内外を傾く。文宗死し、明宗の二子寧宗、順帝相繼ぎて立つ。燕帖木兒其女を納れて順帝の皇后となし、天下の大權を專にす。燕帖木兒死し、帝伯顔に信任す。伯顔は燕帖木兒の黨與を貶竄し盡して、獨り國政を握り、遂に不臣の志を懷く。伯顔の義子脱、々順帝と謀りて伯顔を退け、代りて國政を統ぶ。時に皇紀二千年なり。

帝位相續の争と權臣の跋扈

成宗以來帝位相續の際、必ず多少の紛争を起し、從うて權臣擁立の功を負うて威福を擅にするもの斯に四十年、元の中央政府は全く腐敗せり。之に乗じて漢族敵愾の氣焰漸強く、叛亂四方に起りて、遂に元室の滅亡をきたせり。

第四章 元の滅亡と明の興起と

交鈔の濫發と
物價の騰貴と

元は國初より交鈔を發して一時の財政を救ひしが、發行の過
度なるに従ひ、其價益下落し、順帝の時に至りては全く通用を
なさず。物價騰貴して諸民困苦す。加之元は吐蕃の地を得てよ
り、其地の險遠にして、其俗の獷狃なるを憂ひ、喇嘛を任用して
之を撫御せしめしかば、喇嘛の勢力日に強大を加へて弊害百
出す。即官吏も喇嘛を逮捕する能はざるが故に、彼等は時に民
産を奪ひ、姦惡の徒は其勢に附きて罪網を免れ得るが故に、賞
罰の道廢し、且又喇嘛は納租の義務なきが故に、農夫は其部民
と偽りて田租を輸せざれば、歲入漸く減じ、殊に世祖初めて喇
嘛拔思巴を帝師に拜せし以來、歷代の帝王、皇后皆帝師に就き
て佛戒を受け、佛事供養の費貲られず。順帝の時に至りて尤甚
し。故を以て國庫益缺乏し、勢人民に厚歛せざるべからず。

元代に於ける
喇嘛の跋扈

韓山童と韓林
兒と

方に物價の騰貴に苦める國民は、この負擔に堪えずして、皆亂
を懷ふ。順帝即位以來淫樂を事として國政を顧みず。元室の威
嚴地に墜つるに及んで、蒙古の羈絆を屑とせざる漢人等、四方
に崛起して、元室遂に分崩せり。

韓山童なる者妖術を以て愚民を集め、自から宋の後裔と詐り、
皇紀二十一年亂を直隸の地に起し、軍敗れて執へられしも、
其部將福通遁れて河南に入り、山童の子韓林兒を奉じて宋帝
となす。之を紅巾賊といふ。山東、山西、陝西の地、多く之に響應す。
是に於て李二、張士誠等叛旗を江蘇の地に翻し、郭子興は安徽
の地を占め、徐壽輝は湖北、湖南を畧し、方國珍は浙江に據り、海
内亂れて麻の如し。
郭子興の部將に朱元璋あり。士卒の心服を得、遂に子興に代り

郭子興、徐壽
輝及方國珍

宋元璋と陳友諒と

宋元璋徐達等をして元を伐らしむ

て其衆を領し、皇紀二千十五年南に下りて金陵(江蘇江寧府)に據る。徐壽輝の部將に陳友諒あり。壽輝を殺して其衆を領し、湖南、湖北及江西の地に蹻蹻し、更に江東を併さんと欲し、張士誠と東西より朱元璋を夾撃せんとせしかば、皇紀二千廿三年元璋先發し、大に友諒を鄱陽湖に破りて之を殺し、悉く其領土を奪ひ更に軍を移し、張士誠を破りて江淮の地を收め、又南方國珍を降し、かば、江の南北一帯の地概ね元璋の有に歸す。是に於て胡廷瑞等をして南福建、兩廣の地を平定せしめ、徐達、常遇春等をして北に向うて元を伐たしむ。徐達等先づ山東を略し、河南を取り、潼關を陥れ、遂に河北に渡り、到る所元軍を摧破し、四面より大都に逼る。是より先き元の丞相脱々出征して李二を平げ、張士誠を破り

元室の形勢

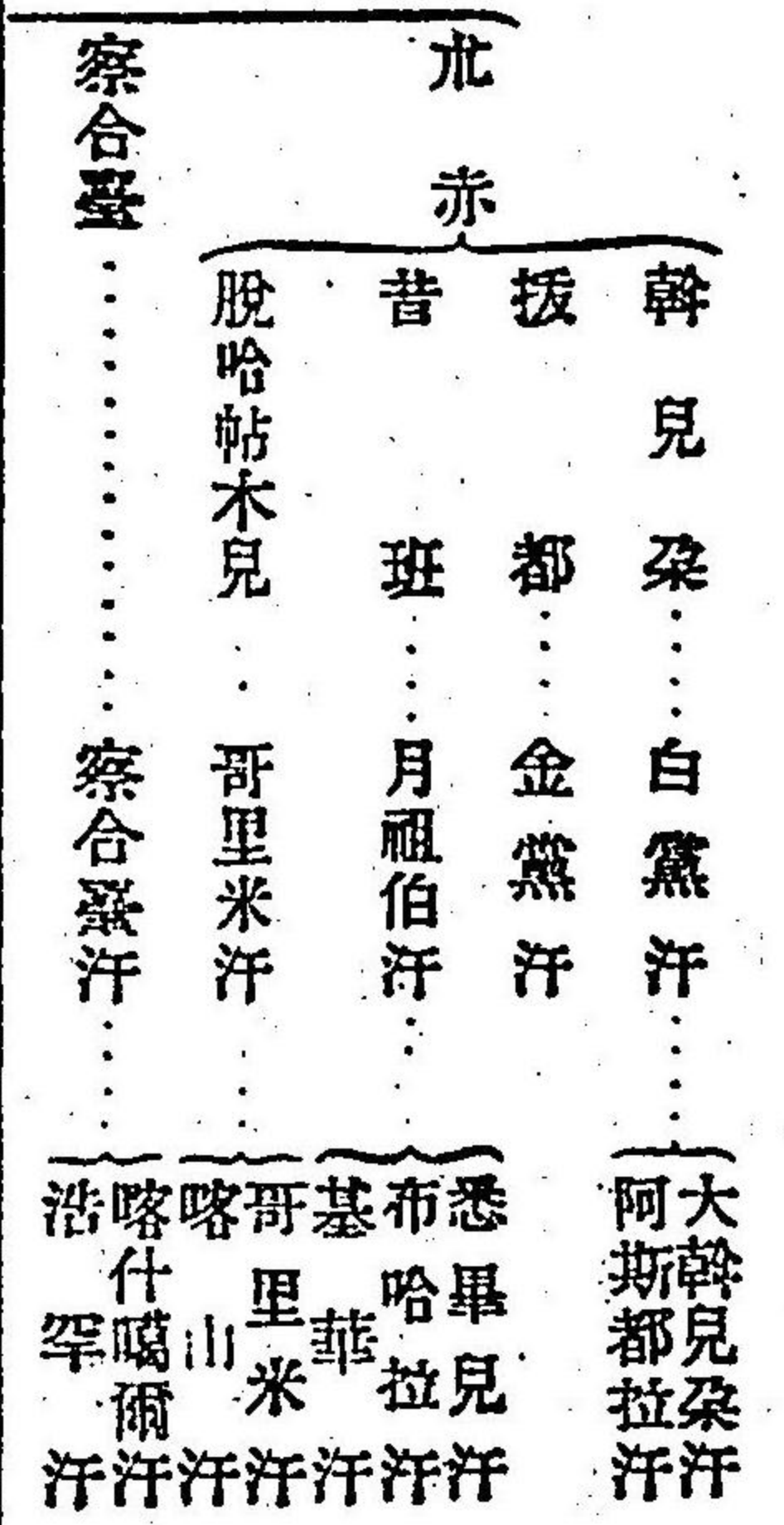
擴郭帖木兒と李羅帖木兒と

しが、帝の寵臣哈麻もと脱々と隙ありければ、之を讒し代りて丞相となり、帝に宴樂を勸めて國政を專にす。搠思監繼ぎて丞相となるに及んで、宦者と相表裏し、四方の警報を壅塞して益禍亂を養成す。老的沙なる者之を彈劾せしが、皇太子愛猷識里達臘は老的沙を惡みければ、搠思監と謀りて之を斥く。老的沙走りて太同(山西大同府)の主將、李羅帖木兒に依る。時に河南の主將に擴郭帖木兒あり。李羅帖木兒と權を争うて相善からず。皇太子及搠思監は之を引きて李羅帖木兒を除かんとす。李羅帖木兒先づ發して大都に逼り、皇太子を上都に奔らしめ、搠思監を殺し、代りて丞相となり、國政を專にす。已にして皇太子は、擴郭帖木兒と兵を合せて大都を攻む。大都の朝臣之に應じて李羅帖木兒を殺す。順帝遂に擴郭帖木兒を丞相に拜し、天下の兵馬總

元の滅亡と明の太祖の即位

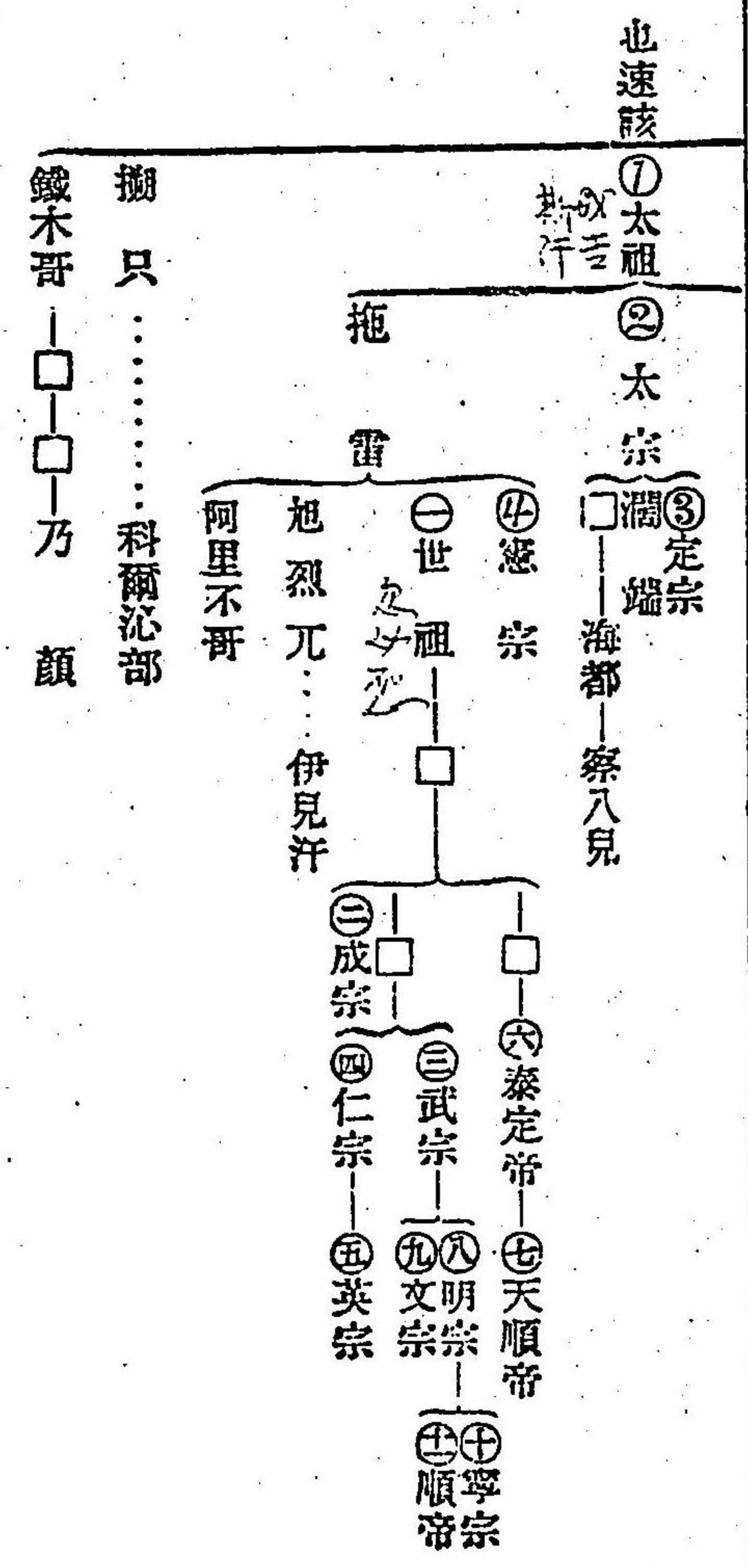
元帥を兼ね、南方を征定せしむ。擴郭帖木兒其勢を負うて不臣の志を懷き、太原に叛せしかば、更に諸將をやりて之を討せしむ。是時徐達等正に大都に逼りければ、元軍は防戦に暇なく、順帝は上都に奔る。世祖國號を建て、より九十八年にして元亡ぶ。實に皇紀二千廿八年なり。朱元璋帝位に即き、支那本部の地に君臨す。之を明の太祖(洪武)となす。

蒙古帝王略系 (□符は本女に關係なき人物、洋数字は蒙古大汗の順序和数字は元朝帝王の順序を示す)



第五章 明初の外征及内治

明の太祖は畧支那本部を一統せしと雖ども、元軍尙上都を根據とし、長城附近に出没して恢復を圖り、四川、貴州、雲南の地にも亦、帝若くは王を稱して、明に歸服せざるものあるが故に、こ



の兩方面の經畧に従事せざるべからず、
 元將擴郭帖木兒は已に其罪を赦され、太原を根據とし、山西、陝西、甘肅の兵を領して、大都を恢復せんことを圖りしが、明將徐達連に其軍を破る。時に順帝も亦明將常遇春の爲に上都を逐はれて、應昌(内蒙古多倫諾爾の東)に遁れ、遂に其地に死し、太子愛猷識里達臘は明軍を避けて、大汗を喀喇和林に稱す。是に於て擴郭帖木兒其敗兵を收めて、喀喇和林に往き、大汗と會し、新に大軍を募りて南下せんとす。太祖徐達をやり之を擊破せしむ。徐達は擴郭帖木兒と土拉河畔に戦ひしが、功なくして還る。時に皇紀二千卅二年なり。愛猷識里達臘死し、弟脫吉思帖木兒、大汗となるに及んで、納哈出をして吉林地方の蒙古諸族を召集して、遼東に侵入せしむ。皇紀二千四十七年、明將馮勝、藍玉等、兵廿万に將

愛猷識里達臘
 と脱吉思帖木
 兒と

明軍大に脱古
 思帖木兒を破
 りて、漠南を平
 定す

として納哈出を金山(奉天府開原縣の西北)に破り、翌年進んで脱吉思帖木兒を捕魚兒湖畔に襲ひ、其皇子妃嬪を擒にす。脱吉思帖木兒僅に身を以て喀喇和林に奔りしが、途土拉河畔に至りて、長子也速迭兒の弑する所となる。是に於て蒙古の部屬全く潰散し、漠南、滿州の地は皆明の版圖に歸せり。

明の太祖又西
 南方を平定す

太祖は北方を經畧すると同時に、又兵を西南の方面に用ゆ。さきに陳友諒の徐壽輝を殺すや、壽輝の部將明玉珍は四川に入り、成都に據りて夏帝と稱す。玉珍死し、子明昇嗣ぎしか、皇紀二千卅一年、明將湯和、傅友德等攻めて之を降し、軍を進めて雲南、貴州に向ふ。時に元の宗族、把匝剌瓦爾密、雲南に王たりしが、防戦して敗死せり。友德は更に大理、金齒等、雲南西部の諸蠻を降せしかば、西南境悉く平ぐ。時に皇紀二千四十一年なり。

明の太祖の内
外に對する政
策

燕王兵を擧ぐ

太祖已に南北を平定してより、外は遼東(盛京遼陽州治)大寧(内蒙古喀喇沁)大同(山西大同府)開平(甘肅甘肅州府)甘州(甘肅甘肅州府)貴州(貴州貴州府)洮州(甘肅鞏昌府)等邊要の地に、行都指揮使司をおきて國防を嚴にし、内は元末の諸弊を革め、租税を軽くし、賞罰を明にし、官制刑法は概、唐代の舊に復せり。太祖又宋の郡縣制度を用ゐて、帝室孤立せしに懲り、諸皇子を要地に分封して、帝室の藩屏となせしが、其邊陲の諸王には、特に征伐の自由を附與せしを以て、漸く尾大の勢をきたし、太祖の死後幾ならずして、内亂を醸すに至れり。

皇紀二千五十八年太祖死し、太孫惠帝(建文帝)立ち、諸王の強大を恐れ、黃子澄等と漸く之を抑壓せんことを謀る。諸王是に於てか安んぜず、燕王棧は帝の叔父なり。燕京に據り、北邊を鎮して夙に重望あり。元の降卒多く配下に歸するに及んで、其勢益強

燕王遂に國を
竊ふ

北京及南京

く、竊に不臣の志を懷く、惠帝の諸王と相善からざるを機として、叛旗を擧げ、君側の姦を除くを名とし、大軍を擁して南に下る。

さきに太祖は惠帝の年若くして、功臣を制馭し能はざるを慮り、多く宿將を誅殺せしかば、燕王の南下するに及んで、朝廷の諸將よく之を防ぐ者なし。燕王は連に山東、江淮の地を下して金陵に逼る。金陵の宦者多く燕王に通じ、城遂に陥る。惠帝出奔して行く所を知らず、燕王代りて帝位に即く。之を成祖(永樂帝)となす。時に皇紀二千六十二年なり。成祖都を元の故都に移して北京となし、舊都金陵を南京となす。

成祖雄志あり。北は親しく塞外に出で、元の遺族を破ぶり、南は安南の内亂あるに乗じて之を滅ぼせり。安南は陳吟の時元

元末明初に於ける安南の形勢

に歸服せしより、子烜、孫喬皆賢主にして、國內太平なりき。元室衰亡の時、喬の子暉は早く明に好を通ぜしも、暗愚にして國內治らず。占城之に乗じて屢其南境を侵し、時に或は其國都を陷れしが、黎季犛なる者之を撃退せし功を以て漸く勢を得、遂に安南の政權を掌握するに至れり。陳暉の後四傳して、其從子頤に至る。頤の皇后は黎季犛の女なりければ、季犛の勢威内外を傾け、遂に頤を弑し、其子突を立てしが、幾ならずして又之を廢し、自立して國を大虞と號す。時に皇紀二千六百十二年なり。乃使を明にやり、詐りて陳氏の血統絶ゆると上言せしかば、成祖は季犛の子漢蒼を安南國王に封ぜり。陳喬の裔に天平あり。難を避けて老樾に往く。老樾之を明に送致す。成祖之を安南に納れんとせしに、遂にして黎季犛の殺す

明の成祖安南を平定す

所となりければ、成祖大に怒り、皇紀二千六十六年、張輔を兵八十万に將として大虞を伐たしめ、大に其軍を富浪江(紅河)畔に破ぶる。曩に季犛屢占城を侵し、かば、是に至りて占城は明軍に應じて南境に逼る。明軍遂に季犛父子を擒にして安南を平定し、其地に交趾布政司をおきて之を統轄す。是に於て占城、老樾の諸國も相尋で明に内附するに至れり。明已に安南を取りて故の陳氏の後を立てず。又令して其國俗を改めければ、安南人之を悦はずして往々叛を謀る。成祖の末年に至り、黎利なる者衆を煽動して亂を作す。成祖死し、子仁宗は在位一年にて死し、孫宣宗(宣德帝)立つに及んで、王通をして之を征せしめしが、反つて大敗し、黎利と休戰を約して還れり。利因て陳氏の後を立て、國王となさんことを請ふ。宣宗之を許

安南の黎利明の羈絆を脱せんとす

鄭和の遠征

明威南洋に振ふ

し、悉く安南に派出せる吏員を召還す。時に皇紀二千八十九年なり。幾ならずして黎利は陳氏の後絶えたりと稱し、命を明に請ふ。宣宗已を得ず、利を封じて安南王となす。安南是より支那に羈屬して世々臣禮をとる。

曩に成祖の位に即くや、惠帝の海外に逃亡せるを疑ひ、皇紀二千六十五年宦者鄭和に命じ、大船六十艘、水兵四万を率ゐ、遍く南海諸國を訪ひ、服せざる者あれば輒之を征せしむ。明安南を併せ、國威の南海に加はるに従て琉求、眞臘(東埔)、暹羅、滿刺加、勃泥、蘇門答刺、瓜哇、榜葛刺等卅餘國皆明に來貢せり。

鄭和は成祖、仁宗、宣宗の三朝に仕へ、南海に使用する者前後七回に及べり。明の中世以後、國威寢衰へしと雖ども、南海諸國との交通は舊の如く、彼此の往來極めて頻繁なりき。

第五篇 元末明初の塞外の形勢

第一章 察合臺、伊兒兩汗國の衰亡と帖木兒の興起と

元朝が東方に衰微すると同時に、察合臺、伊兒、欽察の三汗國も亦其勢力を西方に失ふに至れり。蒙古の諸汗國が爾く衰微するに至りし大原因は、主として其王位相續法の完全ならざるに在り。蓋蒙古の慣習として、有力にして年長なる者を推して、汗位を占めしむるは、游牧人種にとりて、頗る適當なるべしと雖ども、苟も一帝國を建設する以上は、早晚篡奪の紛擾を免れざればなり。

蒙古諸汗國衰微の大原因

察合台汗也先
不花と伊兒汗
鄂勒哲圖と

察合台汗國の
衰微

「トグルク」汗
と「エリアス」
汗と

皇紀千九百六十九年都哇の子也先不花察合臺汗となり、屢元を侵し、も仁宗の爲に敗られ、其東邊の地を失ひしかば、皇紀千九百七十五年、更に呼羅珊に侵入して、地を西に擴めんとせしが、偶、元兵和世辣を追うて、其東境に逼ると聞き、匆々軍を還へず。時に阿八哈の孫鄂勒哲圖伊兒汗たり、也先不花の退軍を蹶し、大に其の西南境を劫掠して去る。察合臺汗國是より遂に振はず。其の後嗣者も亦概暴君にして、政治上及宗教上の反亂相踵ぎ、也先不花の後僅々四十年間に十五汗の更迭を経、察合臺汗國殆分崩し、西爾河南に於ける各部の酋長は、遂に獨立の姿をなせしが、皇紀二千十九年、察合臺の後裔「トグルク」汗位を占むるに及んで、大軍を起して中央亞細亞の叛者を征服す。時に蒙古の疎族に帖木兒あり、柯提附近の酋長なりしが、率先し

帖木兒中央亞
細亞を平定す

帖木兒察合台
汗國を定む

て「トグルク」の旗下に屬す。幾ならずして「トグルク」は、其本國に叛亂起りしを以て軍を還へし、子「エリアス」を中央亞細亞に留め、帖木兒をして之が參謀たらしむ。然れども帖木兒は「エリアス」を議合はずして、花刺子摸に遁れ、兵を募りて「エリアス」を撃つ。會「トグルク」死し、「エリアス」東に還りしを以て、彼は悉く中央亞細亞を占領し、都を撒馬兒罕に奠む。時に皇紀二千廿九年にして、彼の年齒正に三十七歳なりき。
帖木兒大志あり、成吉思汗の舊圖を襲ひ、世界を一統せんと欲し、中央亞細亞を平定せし餘威を駈り、葱嶺を踰えて東に進み、「エリアス」の幼弟にて、當時喀什噶爾汗たりし「キズル」を婚を通じて、悉く察合臺汗の舊土を定め、又西に向うて花刺子摸を伐つ。花刺子摸はさきに欽察汗の版圖に屬せしが、其内亂に乗じ

察合台伊兒汗國の衰亡と帖木兒の興起

勢 伊兒汗國の形

で漸く獨立の姿をなす。帖木兒之を擊破し、更に伊兒汗の衰ふるに乗じて呼羅珊に侵入す。

旭烈兀の孫、阿魯渾は皇紀千九百五十一年を以て死し、三傳して其子合贊に至り、内は憲法を制定して國政を改良し、外は羅馬法王、ボニフェス八世と同盟し、十字軍に加はり、埃及の算端を伐ちて、シリアの地を恢復せしが、皇紀千九百六十三年を以て死し、弟鄂勒哲圖を経て其從子阿不賽因に至る。年僅に十二なりければ、國內の貴族等漸く汗に従はず。加之、欽察汗は屢其北邊を侵し、國威益揚がらず。皇紀千九百九十五年、阿不賽因死して嗣子なく、旭烈兀の弟阿里不哥の遠孫、アルバクーン其後を承くるに及んで、呼羅珊、シリアは獨立の姿をなし、伊兒汗國殆分崩す。旭烈兀の遠孫に、アウイスあり。八吉打に據りて呼羅

勢 伊兒汗國の衰

伊兒汗合贊

帖木兒伊兒汗
區を併す

珊の地を恢復せしが、其子「アーメド」暴虐にして、呼羅珊の住民等意を帖木兒に歸せしかば、帖木兒は呼羅珊より波斯に入り、遂に伊兒汗の領土を併す。

帖木兒今や察合臺、伊兒兩汗國を一統して、直に欽察汗國と境を接し、殊に彼は曩に欽察汗の舊領地、花刺子摸を征服せしを以て、斯に欽察汗との間に衝突起る。

第二章 欽察汗國の盛衰と帖木兒の雄圖と

勢 欽察汗國の形

欽察汗の始祖、拔都の孫、忙哥帖木兒は皇紀千九百四十年を以て死し、其弟脱々、蒙哥、其子脱々、相繼ぎて欽察汗となり、阿羅思の諸侯王を帥ゐて、屢波蘭土、匈牙利を劫畧す。皇紀千九百七十二年、忙哥帖木兒の孫、月即別、脱々に繼ぎて欽察汗となり、埃及

欽察汗月即別
とモスカウ
公宜萬一世と

魯西亞帝國勃
興の起源

の哈利發と婚を通じ、同盟して屢伊兒汗阿不賽因を伐ち、又東羅馬帝國及歐洲諸國と交通して其文化を傳ふ。當時以太利人、殊に「ゼヌア」人は、欽察汗國に來りて盛に商業を營み、阿速海濱は東西兩洋貿易の要所となれり。

是より先き阿羅思は幾多の小國に分裂し、就中「チユエル」「モスカウ」の二公威望尤高く、交、欽察汗に命ぜられて阿羅思の太公となり、自餘の小諸侯を統御せしが、月即別汗の時「チユエル」公叛を圖り、「モスカウ」公宜萬一世之を征討して功ありければ、汗の親任を得、皇紀千九百八十八年命ぜられて阿羅思の太公となり、汗に代りて全國の租稅徵集者となる。爾後彼は欽察汗の威名を借りて、阿羅思の諸侯を使役し、専ら家門を營立するを力め、此の如くして魯西亞帝國勃興の基礎は、漸く是時に建設

せられたり。

月即別汗は皇紀二千六年を以て死し、二傳して子札尼別に至る。よく父の遺業を紹ぎ、匈牙利、波蘭土を侵し、又伊兒汗國を畧して大に欽察汗の武威を輝かせり。月即別、札尼別の二代は、實に欽察汗國の最盛期なりしが、皇紀二千十七年札尼別死してより弒逆相繼ぎ、遂に拔都の後裔たる、金黨汗の血統斷絶するに至れり。

拔都の欽察汗となるや、其兄斡魯朶は、白黨の汗と稱し、子孫世々アラ海の東北、吉利吉思荒原の地を領し、其弟昔班の子孫は、白黨汗國の西、アラ海の西北に蟠居して、月即別の汗と稱し、昔班の弟脱哈帖木兒の子孫は、阿速海沿岸の地を占めて、哥里米の汗となりしが、今や金黨汗の血統絶ゆるに及んで、此等三汗

金黨汗の斷絶
と白黨の月即
別、哥里米三
汗國の割據と

阿羅思の諸侯
と欽察汗との
關係

國の諸王は、欽察汗たらんことを争ひ、紛擾止む時なく、札尼別汗の死後、廿年ならずして十五汗の廢立を見るに至れり。此間に白黨の汗、ウルスは一時勢を得て、哥里米の汗、トクタミシを逐ひしが、後者は帖木兒に依り、其後援を得、白黨の汗を破りて、欽察汗となる。時に皇紀二千三十六年なり。曩に阿羅思の諸侯を欽察汗に羈屬するや、彼等は歲時に親しく薩來に伺候して、幣物を捧げざる可らず。彼等は租税の外に、血税の義務を有し、一朝事ある時は汗の爲に相當の兵士を派出せざるべからず。彼等は汗の許可なくして、宣戰媾和すべからず。彼等は又汗の許可あるにあらざれば、其領土を世襲する能はず。此等の苦痛は彼等の忍び得べき所にあらざれば、欽察汗國の内亂を機として、獨立を圖り、復約束を奉せず。トクタミ

トクタミシ
欽察汗國を中
興す

トクタミシ
欽察汗國を中
興す

シ、已に欽察汗國を一統するに及んで、皇紀二千四十年阿羅思に侵入して、モスカウを焼き、大に殺掠を恣にせしかば、阿羅思の諸侯等復欽察汗に臣服するに至たり。是に於て、トクタミシは其成功を負ひ、花刺子摸を侵して地を東南に擴めんことを圖る。

帖木兒「トク
タミシ」を破
りて阿羅思に
侵入す

帖木兒は「トクタミシ」の背徳を怒り、伊兒汗國を平定し終るや、皇紀二千五十年自から大軍を帥る、撒馬兒罕より塔什罕に向ひ、札牙黑河（「ウラ」河）を渡る。「トクタミシ」之を亦的勒（「ウガ」河）畔に逆撃して大敗し、阿羅思に遁れ、諸侯の援助を得て、稍勢を恢復せしが、皇紀二千五十五年帖木兒復之を破り、追うて阿羅思に入り、大に「モスカウ」を掠奪す。是に至りて「トクタミシ」全く勢を失ひ、「ウルス」の子、「ユイリヂヤク」帖木兒の命を以て欽察汗と

成吉思汗西征以後に於ける印度の形勢

なる。帖木兒は已に西北方の經畧を終りたれば、今や南して印度に侵入せんとす。

成吉思汗の西征以來、太宗、憲宗の時、蒙古兵頻年印度河の流域を劫掠せしかば、デルヒの奴隸王朝の威力爲に大に衰微せるに乗じ、皇紀千九百五十年、ゴール家の疎族、ヂエラル、ウザン之を斃し、代りて、デルヒの算端となる。其從子、アラ、ウザン勇略に富み、西、北中三印度を征し、又賓都耶山を越えて、遠く南印度を侵畧し、殆全印度を統一するの勢ありしが、其死と共に國復分崩す。アラ、ウザンの部將、ギヤース、ウザン内亂を靖めて、トクラク王家を興し、ウザンに至り、波斯、支那に遠征を企て、皆成功せず。反つて國庫の欠乏を招き、加之彼は回教の普及を強迫せしが故に、温都教徒の叛亂相踵ぎ、皇紀二千七

「トクラク」王家の盛衰

年には、其部將、ズフルも亦賓都耶山南の地に獨立して、ハイマニ王家を建設せしかば、トクラク王家の威力全く地に墜ちたり。方に是時に際して帖木兒は可不里より印度に入り、ムルタンを侵し、皇紀二千五十九年遂に、デルヒを陥れて掠奪を恣にせしが、會、阿斯曼帝國の、バヂゼト其虛を襲はんとするの報を得て、匆々軍を還へす。

隋唐の初世、突厥種族は已に中央亞細亞に彌蔓せしが、皇紀千八百八十年の頃、裏海東岸の突厥種族は、成吉思汗の銳鋒を避けて、小亞細亞地方に遁れしが、皇紀千九百六十年の頃、阿斯曼其部長となり、伊兒汗國の衰微せるに乗じ、小亞細亞の地を畧して、阿斯曼帝國を建設す。即今の土耳其帝國なり。子孫よく其遺圖を紹ぎ、國勢益張りしが、皇紀二千四十九年、バヂゼト立つ

帖木兒大に土耳其帝國「バヂゼト」を破る

帖木兒明を征
せんとして中
途に死す

に及んで、大に東羅馬帝國を破り、又埃及の算端と通じ、帖木兒
を夾撃して地を東に擴めんことを圖る。帖木兒印度より還る
や、先づ「シリア」に入りて埃及兵を破り、尋で「バダゼット」と「アンコ
ラ」に激戰して之を擒とし、悉く小亞細亞の地を定む。時に皇紀
二千六十四年なり。

曩に帖木兒の察合臺汗の故土を定むるや、東顧の憂を絶たん
が爲に、皇紀二千四十七年始めて好を明に通ぜしかば、太祖も
亦之に報じ、爾來使者の往來頻繁なりしが、帖木兒今や四方を
平定するに及んで、明を滅ぼして世界一統の實を擧げんと欲
す。時に蒙古の脱古思帖木兒土拉河畔に死し、部落漸く分崩せ
しかば、蒙古の王族の來りて帖木兒に投する者多し、是に於て
彼は蒙古の恢復と、回教の傳播とを口實として、大に東征の軍

沙合魯

を起す。明の成祖之を聞き、宋晟に命じて、甘肅の方面を警戒せ
しめしが、帖木兒は訛打兒に到り、疾を獲て死せり。實に皇紀二
千六十五年なり。帖木兒の死後、子孫位を争うて内難起りしが、
皇紀二千六十八年帖木兒の末子沙合魯は、哈烈より起りて、之
を平定し、中央亞細亞に君臨せり。

第三章 瓦剌の極盛

脱古思帖木兒の死後、蒙古部大に亂れてよく統一するなし。脱
古思帖木兒の後五傳して、其孫坤帖木兒立つ。鬼力赤なる者之
を弑し、蒙古の國號を去り、自から韃靼可汗と稱せしが、部民服
せず。成吉思汗の弟、朮只の後裔阿魯台、鬼力赤を殺し、坤帖木兒
の弟、本雅失里の亂を避けて、撒馬兒罕に在るを迎立して可汗

明の成祖時代
に於ける蒙古
部の形勢

韃靼部の阿魯
台と瓦剌部の
馬哈木と

となす。時に皇紀二千六十五年なり。明の成祖之を聞き、本雅失里を招致せしも、命に應ぜざりしかば、明將邱福之を臚胸（倫、克魯）河畔に撃ちしが、反つて大敗す。是に於て皇紀二千六十九年成祖自から五十万の大軍に將として、本雅失里を幹難河畔に破る。瓦剌の部長馬哈木此機に乗じて本雅失里を殺し、其子答里巴を擁立して權勢を專にす。阿魯台もと馬哈木と隙ありければ、韃靼の餘衆を率ゐて遂に明に降れり。瓦剌は即幹亦刺部なり。もと蒙古に羈屬せしが、元朝の衰微し、察合臺汗國の滅亡すると共に、漸く勢力を増進して、外蒙古の西部及天山北路を占領せり。成祖の時馬哈木其部長となり、韃靼の敗亡に乗じて漠北を一統し、遂に明に入寇せんとせしかば、皇紀二千七十四年、成祖は阿魯台と兵を併せて瓦剌を破り、

脱歡と也先と

兀良哈部

追うて、土拉河畔に至る。馬哈木窮蹙して明に降れり。蒙古一帯の地、今や明に歸服せしと雖とも、韃靼と瓦剌との二部は、東西對立して相仇視す。韃靼の部長阿魯台は、一時瓦剌部を壓倒せしが、馬哈木の子脱歡、瓦剌の部長となるに及んで、連に韃靼を破り、皇紀二千九十六年遂に阿魯台を殺し、かば、其部下は遠く東に移り、興安嶺の麓に、科爾沁部を建て、自餘の韃靼部は悉く脱歡に降る。脱歡は脱古思帖木兒の曾孫、脱々不花を韃靼の可汗となして權勢を專にす。脱歡の子也先、勇畧に富み、西は哈密及河西を畧し、東は兀良哈部を降す。兀良哈部はもと滿州吉林地方の通古斯族にして、成祖の惠帝と戦ひし時、之を助けて大功ありければ、遂に大寧附近の地を得て其根據となせしが、是に至りて瓦剌部に從ひ、明の内憂外患あるに乗じ

明と麓川部との關係

て其北邊に入寇す。

曩に太祖の時、大理、金齒の諸蠻部を降してより、明の邊境は麓川（雲南永昌府騰越州附近）部と接す。麓川の部長思倫明に服せず、反つて衆卅万を盡して邊を擾し、かば、太祖將を遣りて之を平定せしめしが、太祖の後五傳して、宣宗の子英宗（正統帝）立つに及んで、思倫の子思任復叛き、緬甸を侵し、又金齒以下の諸部を併せ、西南邊大に擾れしかば、皇紀二千百一年、英宗は蔣貴、王驥等をやり、思任を追うて緬甸に入り、遂に之を擒とせしも、其子孫尙所在に潜匿して、邊境未だ靖からず。加之内は宦者權を弄して、朝政漸く紊れたり。方には是時に際して、瓦剌北邊に寇す。英宗は宦者王振に聽き、親征して土木（直隸宣化府土木堡）に至りしが、大敗して虜となる。實に皇紀二千百九年なり。瓦剌の兵直に北京に逼る。于

瓦剌の也先入寇す

于謙北京を固守す

瓦剌の也先大元天聖可汗と稱す

瓦剌漸く衰ふ

謙等英宗の弟景宗（景泰帝）を擁立し、北京を固守して瓦剌を破りしかば、瓦剌遂に和を請ひ、英宗國に歸ることを得たり。是より先き脱々不花は、也先の專權を厭うて内相惡む。其明に入寇して功なきに及んで、也先は脱々不花の明と通ずるを疑ひ、之を弑し、自から大元天聖可汗と稱し、驕暴益甚しかりしかば、皇紀二千百十四年、其重臣阿剌（阿剌）之を殺し、代りて其衆を領せしが、韃靼の部長孛來（孛來）は又阿剌を擊破し、毛里駭（毛里駭）なる者と謀り、脱々不花の子麻兒可兒（麻兒可兒）を立て、可汗となす。是に於て瓦剌の勢衰へ、明は姑く北邊に事なきを得たり。

第五篇 明の中世及末世

第一章 宦者の專横と明室の衰微と

土木の敗に際し、景帝于謙に擁立せられて帝位に即き、以て民心を鎮めしが、後瓦剌と和し、英宗歸國するに及んで、二帝の間相和せず。已にして景帝病みて起ざりしかば、石亨之を機とし、宦者曹吉祥と謀り、英宗を擁して重祚せしむ。曹吉祥是より其功を負うて威福を擅にす。

宦者専權の由来

初め明の太祖は、歴代の成敗に鑑み、宦者の政事に預るを嚴禁せしが、成祖位を篡ふに及んで、宿將舊臣の已に服せざる者あるを疑ひ、宦者の先づ内應せしを徳とし、厚く之に信任せしより、寔政權を左右し、英宗の時、先には王振あり、後には曹吉祥あり。英宗の子憲宗(帝成化)の時には汪直あり、憲宗の後孝宗(帝弘治)を経て武宗(帝正徳)に至り、宦者劉瑾事を用る悉く正士を斥け、大に朝政を紊す。世宗(帝嘉靖)其後を承けて宦者を黜けしも、幾

安化王及寧王の反

ならずして嚴嵩に信任して、國事を顧みざりしかば、明の中央政府は全く腐敗せり。

宦者威權を弄してより、朝臣争うて百姓に聚斂し、以て宦者に厚賄せしかば、人民嗟怨し、所在に盜起り、直隸、山東、河南、湖北、湖南の地殆寧日なし。皇紀二千百七十年安化王寔(鐸)は、劉瑾を誅するを名として、兵を寧夏(甘肅)に擧げ、帝位を篡はんことを圖る。幸にして平定せしが、尋や寧王宸濠又南昌(西江)に反し、江南の地大に擾れ、王守仁(明陽)の力に頼りて僅に之を誅戮するを得たり。然れども國力はより困憊して、遂に復振ふ能はず。吐魯番、緬甸等之に乗じて、連に北塞南徼を侵せり。

(第一)吐魯番との關係 元室滅亡の時、蒙古の王族安克帖木兒、哈密を領せしが、明軍河西を定むるに及んで、遂に朝貢し、爾後

明の西藩となる。其後瓦刺の勢日に強く、哈密は其侵畧に遇うて國力頗る振はず。哈密の西に吐魯番あり。畏吾兒族之に據る。皇紀二千百十年の頃、阿力其算端となり、瓦刺衰へ哈密の振はざるに乗じて、頻に地を東に開き、遂に明の邊衛を掠む。明軍之を征して功なし。皇紀二千百六十五年阿力の孫滿速兒吐魯番の算端となり、瓦刺を誘うて連年河西の地を攻畧せしかば、皇紀二千百八十九年明廷議して、遂に肅州以西の地を棄つ。爾後瓦刺、畏吾兒の諸部、河西に蹠踞して邊境益堵からず。
(第二)緬甸との關係 明將王驥の南征以來、緬甸は明に服従せしが、雲南の蠻部に孟養あり。其部長は麓川の部長、思任の裔なるが故に、緬甸が曩に明に内應して思任を捕へしを怨み、遂に緬甸を侵し、其國都阿瓦を陥れしかば、緬甸の王族莽瑞體は南洞、吾

に奔り、皇紀二千二百十二年衆に擁されて其地の酋長となる。瑞體勇武英畧あり。時に南洋の航路開けて、葡萄牙人の印度に來る者多し。瑞體之を備うて近衛兵となし、頻に四方を侵畧し、南白古を併せ、尋で北に向ひ、皇紀二千二百十四年阿瓦を恢復し、更に兵を進めて金沙江(伊羅瓦底河)上流の地を平定し、孟密、木邦等雲南地方の諸蠻部を降し、遂に東老樞を破り、暹羅を破りて悉く之を其屬邦となす。

暹羅の地、もと暹と羅對との二部に分れしが、皇紀二千十年亨羅達、怡菩提始めて二部を統一して暹羅國を建て、子孫相嗣ぎて湄南河畔の猶地亞に都せしが、是に至りて緬甸の爲に擊破せらる。緬甸王莽瑞體已に四隣を壓服し、皇紀二千二百卅三年大舉して復北に向ひ、雲南の諸蠻部を率ゐて明を侵し、糧

明將劉綎大に
緬甸王莽應裏
を破る

食竭きて還る。子莽應裏嗣ぐに及んで、皇紀二千二百四十三年復大軍を發して雲南に入寇せしが、明將劉綎逆擊して大に之を破り、追うて阿瓦を陷る。暹羅も亦緬甸の敗亡に乗じて其東邊を畧せしかば、緬甸の勢是より漸く振はず、明は頼に其侵畧を免るゝを得たり。

第二章 明と韃靼との關係

曩に李來、毛里駭、瓦刺を摧きて麻兒可兒を擁立せしと雖ども、幾ならずして二人權勢を争うて相攻撃せしより、韃靼の勢未だ大に振ふ能はざりしが、皇紀二千百卅年脫古思帖木兒六世の孫達延可汗となるに及んで雄畧あり。本雅失里以來、可汗の威嚴日に衰へ、韃靼の諸部所在に割據せしが、達延始めて復之

韃靼の達延汗

達顔汗其領土
を諸子に分つ

喀爾喀部と插
漢兒部と

鄂爾多斯部と
土默部と

を一統し、大元大可汗と號し、明の衰微せるに乗じ、南に下りて河套(鄂爾多斯)の地を畧し、皇紀二千百六十一年大舉して寧夏を陷れたり。達延汗死し、嫡孫卜赤繼ぎて可汗となる。達延汗の時、其領土を漠南、漠北に分ちて其諸子を封ず。末子札賚爾を漠北蒙古(外蒙)に封じて之を喀爾喀部となし、二子巴爾色を吉囊となし、漠南蒙古(内蒙)の西半を統べしむ。吉囊とは副王の義なり。而して韃靼の可汗、卜赤は東に移りて、専ら漠南蒙古の東半を直轄す。其長城に近接せるの故を以て、或は之を插漢兒(察哈爾部、察喀爾は近接の義なり)部と稱す。漠北の喀爾喀部は、明との交渉多からずと雖ども、漠南蒙古部は其地近く、其勢大なるが故に、達延汗の遺圖を紹きて、頻年明の北邊に入寇せり。巴爾色の子究彌哩克其父に嗣ぎて吉囊となり、居を河套に定

俺答喇嘛教を
崇奉す

めて鄂爾多斯部の祖となり、其弟俺答は其北陰山附近に據りて土默部の祖となる。皇紀二千百九十一年以來兄弟屢大同(山西)附近を劫略せしが、究弼哩克の死後、俺答代りて其衆を領し、其從孫黃台士と共に、皇紀二千二百二年大舉して山西に入寇し、剽掠を恣にするもの一月餘、牛馬二百万を奪ひ、男女廿万を殺して去る。爾後科爾沁、挿漢兒の諸部を誘うて、直隸、山西、陝西の地を掠むる者廿餘年、明將會銑、周尙文等屢邊功を建てしも、嚴嵩の爲に疎斥せられしかば、遂に能く之を防ぐ者なし。俺答又瓦刺を破りて地を西に開き、尋で吐蕃を撃ちて青海の地をとる。青海は喇嘛教流行の地なるが故に、俺答も亦漸く之を尊奉し、喇嘛を招致し、寺院を建設し、盛に之が布教を試みたり。俺答已に喇嘛教に歸依してより、殺戮を厭うて復邊に寇せ

ず。皇紀二千二百卅二年に至り、始めて明と好を通じ、馬市と茶市とを河西に開けり。皇紀二千二百四十二年俺答死し、黃台士代りて吉囊となりしか、彼も亦深く喇嘛教を崇信しければ、明に入寇すること稀なりき。

第三章 倭寇及朝鮮の役

元の世祖の入寇後五十餘年にして、我國は南北兩朝に分れて相攻争せしが、南朝敗るゝに及んで、其遺臣或は海を越えて高麗の沿岸を侵掠す。之を倭寇といふ。九州の邊民等も亦漸く之に加はりて、勢轉た強大となる。高麗屢使を我國に遣はして之を禁遏せんことを請ひ、又其沿岸の警備を嚴にせしも、其侵掠遂にやまず。

倭寇高麗を擾
す

李成桂高麗を
襲うて朝鮮國
を建つ

高麗は元宗及忠烈王の時、元の東征に加はりしより、財政大に空乏し、加之爾後元朝は常に國王の廢立に干涉せしかば、内訌も亦繁くして、遂に國勢を恢復する能はず。皇紀二千十二年、忠烈王の從孫、恭愍王高麗に君臨するに及んで、大臣宿將を疎外し、僧遍照に信任して國政頗る紊る。倭寇之に乗じて益高麗の沿岸を掠めしかば、王は親征の軍を起し、も、反つて大敗し、僅に李成桂の力によりて、之を鎮壓するを得たり。恭愍王嗣子なし。遍照の子、辛禰遺命によりて王位を繼ぎ、明の封册を請ひしに、明の太祖は辛禰が王統にあらざるを以て之を許さず。辛禰大に怒り、皇紀二千四十八年、蒙古と兵を併せて遼東に侵入せんとす。李成桂諫むれども聽かざりしかば、成桂は諸將と謀りて辛禰を廢し、故の高麗の王族恭讓王を迎立せ

480

豊臣秀吉朝鮮
を征伐す

しが、柔儒にして民心服せず。李成桂夙に兵間に在りて、威望高かりしかば、國人之を擁して位に即かしむ。之を朝鮮の太祖といふ。時に皇紀二千五十二年なり。明の太祖は李成桂が曩に明に好意を示し、之を徳とし、册して朝鮮國王となす。朝鮮是より明の外藩となる。我國の足利氏天下を統一してより、倭寇寢やみ、殊に南北朝の争亂に疲弊せる日本海沿岸の諸侯は、外國貿易によりて其財政を豊にせんと欲し、此の如くして朝鮮との交通一時頻繁を加へしが、幾ならずして足利氏衰へ、倭寇復朝鮮沿岸に出沒して、彼此の交通絶えしを、豊臣秀吉の天下を統一するに及んで、朝鮮の來貢を促し、且明を伐つゝの嚮導をなさしめしに、命を拒みしかば、皇紀二千二百五十二年、先づ朝鮮征伐の軍を起す。

時に太祖八世の孫宣祖李昺朝鮮に王たりしが、我先鋒加藤清正、小西行長等連に諸城を下し、遂に京城、平壤を陥るに及んで、義州(鴨綠江の河口)に走り、頻に援兵を明に請ふ。世宗の孫神宗(万曆帝)正に明に君たり。朝鮮の請に應じて兵を出し、かば、斯に我國と明との交戦起る。

倭寇明の沿岸を掠む

是より先き明の太祖の即位の初め、倭寇屢、山東、浙江、福建の沿岸を剽掠せしかば、皇紀二千卅年太祖使を我國に派して、邊寇を禁せんことを請ひしも、要領を得ず。是に於て沿海に防倭衛所を設けて、稍之を鎮壓せり。已にして我足利義滿南北朝を統一するに及んで、皇紀二千六十年使を明に遣りて、隣交を修めんことを請ひしかば、明の成祖彼を封じて日本國王となし、爾來足利氏と明との交通絶えず。邊陲の諸侯も亦各自明に通じ、

俞大猷と戚光繼と

其勘合符を得て、盛に貿易に従事せしが、明の奸商等朝臣と結託して、屢我商民を誣き、其物品を購うて直を償はざりしかば、我商民等憤怨して、皇紀二千二百七年以來復其沿岸を剽掠す。時に我足利氏已に衰へ、四方不逞の輩頻に明の沿海に赴き、明の臣民にして朝廷を怨む者も亦來り投じ、倭寇の勢益猖獗となり、江の南北の沿岸、年毎に其害を蒙らざるなし。皇紀二千二百廿三年俞大猷、戚光繼等倭寇を平海衛(福建興化府)に撃破せしより、其患始めて息みしも、彼等は尙臺灣を占領して、時に近海の沿岸に出沒せり。

明軍朝鮮を援うて大敗す

倭寇以來明は頗る我國を惡む。我兵の朝鮮を侵すに及んで、神宗は遼陽の鎮將祖承訓をして赴援せしめしが、平壤に大敗せしかば、更に李如松に命じ、大軍を率ゐて平壤を回復せしめし

も亦碧蹄館(京城北道)に敗亡したれば、神宗大に懼れ、遂に沈惟敬をして和を我國に請はしむ。時に皇紀二千二百五十六年なり。然れども媾和の條件一致せずして、我軍再び朝鮮の征伐に従事せしが、幾ならずして秀吉薨じ、我兵歸國せしを以て、朝鮮王は僅に京城に歸るを得たり。

第四章 明末の黨争

明の學者は政治論を尙ぶ

明の太祖の時、力めて言路を開き、百官布衣を問はず皆上書して國事を論ずるを得せしめしかば、英宗以來、宦者權臣政柄を弄するに及んで、朝政の得失を言ふ者頗る多く、殊に胡居仁、陳獻章、王守仁等の如き大儒の感化を受て、宋學を崇奉し、義理を尙べる當時の學者は、競うて國事を可否するの傾向を生ぜり。

東林黨と非東林黨と

三案、一、二、三

三案の案

時に神宗の皇后王氏子なし。神宗は鄭貴妃を寵し、其所生の幼兒を立てんと欲し、故らに太子を定めず。群臣之を諫めし者皆罪を得たり。中に顧憲成、鄒元標、趙南星の輩あり。憲成己に官を罷められて郷里に歸り、同志の徒を東林書院に會し、講學に託して頗る朝政を可否し、人物を是非す。元標、南星も亦各其郷里に於て、徒を集め學を講じて、遙に憲成に應ず。三人素重名ありて、天下の學者之に就く者多く、朝臣の志を得ざる者も亦頗る之に和附し、而して當路の執政等痛く之を排撃せしかば、斯に東林黨及非東林黨の二派を生じ、明の世を終るまで互に政權を争うてやまず。樞撃、紅丸、移宮の三案起るに及んで、兩黨の軌躅愈激烈を加ふ。

(第一)樞撃 神宗の晩年、遂に庶長子を立て、太子と定めしが、

一日狂人太子の宮に入り、門者を挺撃す。世人或は鄭貴妃が太子を害し、其所生を立てんが爲に、使嗾する所となす。非東林黨は事貴妃に連れば之を不問におくを主張し、東林黨は事太子に關するを以て之を訊問すべきを主張す。

紅丸の案

(第二)紅丸 神宗は皇紀二千二百八十年を以て死し、子光宗嗣ぐ。幾ならずして疾あり。太醫藥を進めしも功なかりしかば、李可灼なる者仙丹と稱して紅丸を進めしに、帝俄に死せり。非東林黨は可灼の悪意なきを證して、之を不問におくを主張し、東林黨は其有罪を主張す。

移宮の案

(第三)移宮 光宗の死するや、其寵妃李選侍太子熹宗(天啓帝)を擁せしかば、執政等其國政に干涉するを恐れ、強ひて選侍を他宮に移らしむ。東林黨は執政の權畧を釐し、非東林黨は其無禮を

咎む。

此の如く東林黨は理論を主とし、非東林黨は情實を主として相攻争せしが、光宗より熹宗の初年にかけて、葉向高相となり、趙南星以下の東林黨を任用して、非東林黨を排斥す。時に宦者魏忠賢熹宗の乳母客氏と通じ、因て帝の信任を得たりしかば、非東林黨は之に依頼して、悉く東林黨を貶黜す。是より魏忠賢の勢、愈盛にして、内外の大權一に其手に歸し、朝政大に壞れしに乘じて、内亂外寇並び起りたれば、明室遂に滅亡せり。

非東林黨官者と結託す

近世期

第一篇 清の初世

第一章 滿州の興起

覺羅部の督爾哈赤

蒙古一たび金を討滅してより、通古斯族の勢力久く沈淪せしが、長白山附近の通古斯族に、覺羅部あり。世々鄂多理(寧古塔の西南)に居る。皇紀二千百年の頃に至りて、始めて赫圖阿拉(今の興京)に移り、部落漸く蕃盛し、皇紀二千二百四十三年、督爾哈赤其部長となるに及んで更に大に興る。

當時通古斯族は大畧四部に分かる。滿州部は今の盛京の東北部を占め、覺羅部實に之に屬す。其東朝鮮の界には長白山部あ

滿州の興起

通古斯族の四部

り。長白山部の北、寧古塔の東、日本海に莅みて東海部あり。東海部の西北、黒龍江に沿うて黒龍江部あり。滿州部の北、今の吉林府より奉天府の間に扈倫部散居し、扈倫部の西、黒龍部の南は即蒙古の科爾沁部なり。

弩爾哈赤國號を立て皇帝を稱す

弩爾哈赤の覺羅部より興りて滿州を統一するや、扈倫、長白山、及科爾沁の諸部、其の侵畧を恐れ、皇紀二千二百五十一年相連合して來り攻めしが、反つて大敗せしかば、皆前後して弩爾哈赤に降り。是に於て皇紀二千二百七十四年遂に國號を建てて滿州といひ、皇帝を稱す。即滿州の太祖なり。扈倫部中に葉赫部あり、其強を負うて獨り降らざりしかば、皇紀二千二百七十九年(明の神宗の末年)弩爾哈赤自から將として之を撃つ。葉赫部援を明に請ふ。明も亦滿州の強大を恐れ、因て楊錦

弩爾哈赤大に明、朝鮮、葉赫部の連合軍を破る

をして、卅万の大軍に將として、葉赫部を援く。是時宣祖の子、光海君、朝鮮に王たり。曩に明の後援を得しを德とし、兵二万を發して來會せしが、弩爾哈赤逆撃して大に連合軍を渾河畔に破り、勢に乗じて葉赫部を滅ぼし、更に進んで瀋陽を陥れ、又遼陽を取り、遂に都を瀋陽に奠む。即今の奉天府なり。是より先き東海部已に内降せしを以て、今や滿州の領土、西は遼河に至り、南は朝鮮と接し、東は日本海に莅み、北は黒龍江に及ぶ。明廷大に懼れ、新に孫承宗をして遼東を經畧せしむ。承宗將才ありしも、魏忠賢の爲に忌れて、其職に安ずる能はざりしかば、明の邊境は日に蹙る。

皇紀二千二百八十七年滿州の太祖死し、子太宗嗣ぐ。太宗即位の年、明の莊烈帝(崇禎帝)熹宗の後を承けて帝位に登り、先づ魏忠

滿州の太宗朝
鮮を降す

賢を黜け、袁宗煥の將才あるを擧げて滿州を防がしむ。太宗乃、姑く其銳を避け、兵を轉じて朝鮮を伐つ。朝鮮王光海君曩に明に應じて屢滿州を牽制せしかば、太宗阿敏をやりて朝鮮を侵し、平壤を陥れ、京城に逼る。時に光海君の從子、仁祖朝鮮王たり。防戦して利あらず。江華島に遁れしが、明の援軍到らざるを以て、遂に和を滿州に請ふ。時に皇紀二千二百八十七年なり。其後數年にして、滿州が漠南蒙古を經畧せるを機とし、明と通じて、遼東に寇せんとせしが、太宗蒙古より還り、親征して復國都京城を陥れしかば、朝鮮の仁祖遂に明と絶ち、滿州に降りて其封冊を受けたり。時に皇紀二千二百九十六年なり。

太宗已に朝鮮と和して東顧の憂を絶ち、力を專にして明に逼

る。明將袁崇煥よく防戦せしも、幾ならずして反間に罹りて罷めしかば、滿州の兵漸く進んで山海關に逼る。明廷因て漠南蒙古の挿漢兒部に賂うて、滿州を防がしむ。太宗乃、兵を移して漠南の經畧に従ふ。

第二章 漠南蒙古と清との關係及明の滅亡

究彌哩克及俺答等の勢を漠南に振ふや、韃靼の可汗次第に衰微し、僅に挿漢兒部に號令するに過ぎざりしが、皇紀二千二百十八年卜赤汗の孫薩克圖可汗となるに及んで、喇嘛教を崇奉して之を挿漢兒部に傳播し、又地を東に開きて扈倫部を征服し、稍可汗の勢威を恢復す。皇紀二千二百六十四年、其曾孫林丹汗立ち、屢明に入寇せしかば、明は歲幣を厚くして和を議し、且

挿漢兒部の林
丹汗

滿州の太宗漢
南蒙古を平定す

滿州を防がしむ。林丹是より遼東を侵し、又科爾沁部が滿州と通ずるを怒りて之を撃ち、遂に其強盛を負ひ、可汗の實權を恢復せんと欲し、頻に鄂爾多斯、土默特の諸部を凌ぎしかば、科爾沁及漠南蒙古の諸部連合して林丹を防ぎ、且援を滿州に請ふ。是に於て皇紀二千二百九十四年、太宗自から大軍に將として林丹を伐つ。林丹敗死し、其子孔果爾汗降りて傳國璽を獻ず。滿州今や漠南蒙古を平定せしかば、更に國號を改めて清と稱す。漠南蒙古已に清に服せしより、明の北邊一帶は年として其攻伐を受けざるなし。明廷遂に大軍を發し、吳三桂を將として嚴に北邊を防禦せしむ。

明は世宗以來常に外患に苦しむ。北に吐魯番の侵畧あり、南に緬甸、日本の攻掠あり、朝鮮の役起るに及んで國用支へず。是に

明未だ於ける
財政の困難と
流賊の蜂起と

於て皇紀二千二百五十六年、神宗宦者を四方に派出し、鑛山を開きて府庫を充たさしむ。奸吏等之に乗じ多く民財を貪る。尋で又鹽、茶、船舶の課税を増し、かば、天下頗る之を苦しみ、皆亂を懷ふ。皇紀二千二百八十八年、李自成、張獻忠等年穀の稔らざるに乗じ、叛旗を陝西に翻すに及んで、四方の流賊之に響應し、遂に抑制すべからず。

初め明の太祖諸子を要地に分封して、王室の藩屏に備へしが、成祖篡位の後、其已に働ふ者あるを恐れて、痛く諸王の兵力を殺ぎしと、且又當時陝西、山西、河北の兵は概邊を守りて不在なりしとの故を以て、流賊の勢益猖獗を極め、張獻忠は四川を畧し、李自成は陝西、河南を定め、山西を取り、遂に北京を陥れしかば、莊烈帝は自殺し、李自成皇帝を稱す。時に皇紀二千三百四年

流賊の猖獗と
明の滅亡と

明將吳三桂と
流賊李自成と

なり。明は二百七十七年にして亡ぶ。

時に清の太宗正に死し、子世祖(順治帝)嗣ぎ、明將吳三桂と相防ぐ。北京の急なるに及んで、三桂は邊を棄て、還り救ひしが、遂にして其没落を聞き、清の援兵を乞うて李自成を破る。自成遂に陝西に奔る。清軍三桂を助けて之を追ひ、行くゆく山西、河北の地を畧す。世祖已に支那の北部を定めてより、國都を北京に遷し、又阿濟格をして吳三桂以下明の降將と共に、李自成を陝西に平げしめ、多鐸を將として河南、山東を經畧せしむ。

清軍江南を平
定す

莊烈帝の死するや、明の遺臣等神宗の孫福王を南京に擁立し、史可法兵を督して清の南下を防ぎしが、福王暗庸にして將士服せず。多鐸之に乗じ、可法を破り、江を渡り、南京を陥れ、福王を降す。然れども明の王族存する者猶多く、魯王は浙江により、永

桂王緬甸に逃
る

寧王は江西に據り、而して唐王は福建に帝位に即きしも相一致せず。清軍先づ永寧王を殺し、魯王を破り、唐王を虜にす。明の遺臣更に神宗の孫桂王を廣西に擁立し、援を安南に請ふ。安南方に内訌に苦しみ、軍を出す能はず。清軍廣西を侵すに及んで、桂王は逃れて雲南に入る。

清と緬甸との
關係

疊に吳三桂清軍に従うて、李自成を陝西に破り、尋で張獻忠を四川に殺し、今や貴州を定めて雲南に進みしかば、桂王又緬甸に奔る。時に莽瑞體の曾孫、ベンタリ、緬甸に王たり。桂王を赫徑の地に奉じ、木邦、騰越等雲南の諸蠻部と力を併せて清軍を阻つ。清軍伊羅瓦底河を下りて、國都阿瓦に逼りしが、葡萄牙人の來りて緬甸に寓する者、よく防戦せしを以て引き還れり。然れども國人清軍の再侵を恐れ、王が明の遺族を納れしを悦はず。

明の遺將鄭成功

王の弟、ハツラ、ダームマ遂に王を弑して位を篡ひ、桂王を捕へて清に送る。時に皇紀二千三百廿二年なり。

魯王の曩に浙江に敗るゝや、厦門に往きて鄭成功に依る。成功は海賊鄭芝龍の子にして、母は我日本長崎の人なり。後其父と共に明に降服せしより、一意明室の恢復を志し、厦門を根據地として頻に沿海を攻畧せしが、魯王の來り投ずるに及んで軍氣大に振ひ、清軍が雲南に事あるに乗じ、浙江を復し、南京を下して北伐を期せしが、遂に利を失ひ、魯王を奉じて臺灣に退く。

明の末年、我國人の支那沿岸を剽掠する者、臺灣を占領して其根據地となせしが、荷蘭人の支那近海に通商するに及んで、皇紀二千二百八十四年遂に我國人を逐うて之を奪ひ、學校を設け、寺院を建て、専ら文化の輸入に盡力せしが、皇紀二千三百廿

臺灣に於ける
荷蘭人

鄭成功臺灣に
入る

一年鄭成功等魯王を奉じて臺灣に來り、悉く荷蘭人を逐ひ、又使を我國に遣はして後援を乞ひしも、當時我徳川氏は鎖國の方針をとり、外國との交渉を避けられたれば、事遂に成らず。翌年魯王及成功相前後して歿せしも、成功の子鄭經尙臺灣に據りて清に服せず。

清の世祖は皇紀二千三百廿一年を以て死し、子聖祖(康熙)嗣ぐ。世祖の時、明室已に滅亡せしと雖ども、其遺臣尙江南の地に出没しければ、清廷は明の降將吳三桂を雲南に、尙可喜を廣東に、耿繼茂を福建に封じて之を鎮壓せしむ。皆其封内に於ける兵馬、財政の全權を握り、殆ど獨立國の如し。就中吳三桂功最高く兵も亦強し。魯王死し、桂王虜となり、天下已に一統せらるゝに及んで、聖祖や、三藩の強大を憂ひ、竊に之が備をなす。三藩も亦

三藩の叛亂

自から安せず、皇紀二千三百卅三年、吳三桂先づ叛し、四川、貴州を侵す。耿繼茂の子精忠、尙可喜の子之信等相尋で兵を擧ぐ。清の支那を一統するや、辮髮の令を下して其國俗に従はしむ。漢族皆悦ばず。是に於て所在兵を起して三藩に響應し、江南全く賊に没す。三桂は四川より漢中、隴西を陥れ、又鄭經を招きて沿海を攻略せしむ。

聖祖三藩を平定す

聖祖は圖海をして關中に向はしめ、岳樂、傑書等をして江南を平げしむ。時に耿精忠、鄭經と協はずして相攻争せしが、傑書の大軍到ると聞き、恐れて之に降る。尙之信も亦風を望んで來降す。加之圖海已に隴西を復し、岳樂も亦江西を定めしかば、吳三桂の勢日に蹙る。幾ならずして三桂死し、孫吳世璠嗣ぎて雲南、貴州、四川、湖南の地を固守せしも、次第に衰微し、皇紀二千三百

清臺灣を降す

四十一年に至りて全く平定せり。雲南の叛亂已に平定したれば、聖祖は臺灣を取りて後患を除かんと欲し、皇紀二千三百四十三年、施琅を遣り、之を征せしむ。時に鄭經已に死し、子克塽嗣ぎしが、幼弱にして將士服せざりしかば、施琅來攻するに及んで、遂に出で降れり。

第三章 歐人の遠航と耶蘇教の東漸と

蒙古の亞細亞を統一してより、東西兩洋の交通頗る頻繁を加へ、黒海沿岸の哥里米、コンスタンチノール等は重要なる貿易場となりしが、皇紀二千年の頃、土耳其帝國興りて、黒海の航海權を掌握するに及んで、東洋に到達すべき新航路發見の必要起れり。加之蒙古時代に東方に遠遊せし旅行者は、頻に支那

歐人東洋遠航の由來

歐人の遠航と耶蘇教の東漸と

印度地方の富庶にして、我日本の金銀珠玉多きことを吹聴せしより、歐洲人士の意を東方に注ぐ者漸く多く、羅針盤の使用開け、殊に暗黒時代正に終り、一千年間の抑壓を脱して、敢爲冒險の意氣一世を風靡するに及んで、彼等は陸續として東洋に遠航を試むるに至れり。就中葡萄牙、西班牙、荷蘭、英吉利の四國は、海に莅んで航行の術に長せしが故に、自餘の諸國の先鞭を着けたり。

東洋に於ける
葡萄牙人

(第一)葡萄牙 皇紀二千百五十年の頃に、ジョン二世葡萄牙王となり、頻に遠洋航行を奨励せしかば、皇紀二千百五十八年に至り、葡萄牙人、バスコダガマ遂に喜望峰を廻りて、印度の馬拉巴爾に達せり。是より其國人の東洋に航行する者頗る多く、皇紀二千百七十年には、印度西海岸の臥亞を畧して其根據地と

我國及支那に
於ける
葡萄牙
商人

葡萄牙人東洋貿易の
全權を握る

東洋に於ける
西班牙人

なし、次第に錫崙及印度東海岸に商館を建て、尋で滿刺加、瓜哇を奪へり。明の成祖が南洋を經畧せし以來、支那人の南洋に通商する者甚多かりしが故に、已に滿刺加、瓜哇を占領せし葡萄牙人は、又其航路を東に進め、皇紀二千百七十四年始めて支那海に來り、其後三年にして廣東に着し、尋で寧波(浙江)、廈門(福建)に商館を建てしが、皇紀二千二百廿三年更に阿瑪港(廣東の澳門)を占領して根據地となし、同時に我肥前平戸にも商館を設けて盛に貿易に従事し、皇紀二千百六十年より二千三百年に至る百四十年間、葡萄牙人は殆ど東洋貿易の全權を專有せり。

(第二)西班牙 葡萄牙人が亞非利加の南端を経て、東洋に遠航せんと企つる間に、西班牙人は西方に航行して東洋に到達せんことを試み、皇紀二千百八十年、西班牙人、マゼランは亞米利

加の南端を経て、始めて太平洋に出でたり。尋で西班牙王、フィリッポ二世が葡萄牙を併すに及んで、益東洋貿易を奨励し、皇紀二千二百廿五年比律賓群島を占領し、馬尼刺を建て、根據地となし、皇紀二千二百四十年(明の世)使を明廷に遣りて、通商の公許を求めしが、在來の葡萄牙商人に妨害せられて、要領を得ざりしも、我平戸には商館を開きて貿易を營み、且支那人との貿易も亦盛に馬尼刺に行はれたり。

東洋に於ける
荷蘭人

〔第三〕荷蘭 荷蘭もと西班牙の屬國なりしが、宗教上の争よりして、皇紀二千二百四十年遂に其羈絆を脱し、皇紀二千二百五十六年始めて東洋に來りて、錫崙、滿刺加、蘇馬答刺等西班牙領殖民地を奪ひ、葡萄牙及西班牙の商民を驅逐し、皇紀二千二百七十九年瓜哇に「バタヴア」を建て、其根據地となし、皇紀二千

我國及支那に
於ける荷蘭商
人

二百八十四年更に臺灣を占領して、盛に我國及支那と貿易を營めり。皇紀二千三百十三年(清の世)に至りて、「バタヴア」の太守は、使を北京に派して、通商の公許を求めしも、亦葡萄牙人に妨げられて要領を得ざりしが、後鄭成功の爲に臺灣を畧取せらるゝに及んで、荷蘭の艦隊は、清軍を助けて屢鄭氏の軍を破りしかば、遂に廣東に通商するの特許を得、又我國は皇紀二千二百九十九年以來歐洲諸國の通商を禁ぜしも、獨荷蘭は耶蘇教を傳播せざるの故を以て、長崎にて貿易に従事するを許され、此の如くして皇紀二千二百年代の末期より荷蘭人は葡萄牙人に代りて、東洋貿易上尤重要なる位置を占めたり。

〔第四〕英吉利 英吉利人は皇紀二千二百廿九年、始めて印度に航せしより、印度、暹羅、瓜哇等に商館を開き、皇紀二千二百七十

荷蘭人遂に葡
萄牙人壓を倒
す

東洋に於ける
英吉利人

三年我平戸に來りて貿易を營み、尋で皇紀二千二百九十五年支那に赴き、廣東、厦門に於て通商を試みしも、日本の貿易は荷蘭人に妨げられ、支那の貿易は葡萄牙人に妨げられて、大に振ふ能はざりしが、獨印度に於ては次第に勢力を増進して、荷蘭、葡萄牙の商人を壓倒するに至れり。

東西の交通開け、歐人の東洋に航行する者多きを加ふると共に、耶蘇教徒の福音を東方に將來して、元の滅亡と共に、一旦廢絶せし、耶蘇教を再興せんと試むる者、頗其人に乏からず、當時歐洲に於て新舊兩教徒の爭激烈なりしが、舊教徒は新教徒の爲に失ひし勢力を、東洋に恢復せんと欲し、就中堅耐不拔なる「ジエシ、イト」派の教徒は、陸續として東洋に向へり。

舊教徒は皇紀二千百六十年始めて印度に來り、皇紀二千百九

耶蘇教徒殊に「ジエシ、イト」派の東漸

「フランシス、ザウエル」

「マテオ、リシ」北京に會堂を建設す

十九年には臥亞を根據として、盛に傳道に従ひしが、是間に在りて有名なるは「ジエシ、イト」派の「フランシス、ザウエル」(方濟)なり。彼は皇紀二千二百二年を以て臥亞に來り、其後六年にして我平戸に着し、滞在四年、京都、周防、豊後地方に布教を試み、皇紀二千二百十一年復臥亞に歸り、翌年支那に航せしが、中途に死せり。其後皇紀二千二百四十一年「ジエシ、イト」派の「ミケル、ロ」(利瑪竇)廣東に來りて布教を始め、其翌年に有名なる「マテオ、リシ」(寶)も亦支那に來りて布教に従事する者廿年、皇紀二千二百六十一年同志「バントヂヤ」(龐勳)と共に北京に入り、明の神宗の許可を得て、會堂を建てしより、「ジエシ、イト」派の教徒は陸續北支那に來り、「マテオ、リシ」の死後、「ロンゴバルデ」(龍華)、「アダム、ジャー」(湯若望)等其遺業を紹げり。時に或は布教禁止の嚴命

歐人の遠航と耶蘇教の東漸と

「アダム、シヤ
ルビール」と「フ
ルビール」スト

に接せしも、此等の耶蘇教徒は、皆曆法、砲術に精通せるの故を以て、明廷の信任を博しければ、其禁幾ならずしてやみ、皇后、皇族、王侯等も亦、漸く之に歸依せり。清の世祖の北京に入るに及んで、亦厚く耶蘇教徒を用ゐ、アダム、シヤールを擧げて欽天監となす。シヤールに繼ぎて、フルビースト(南懷仁)も亦聖祖に寵用せられ、此の如くして支那の天文、曆法、砲術、測量術は、其面目を一新するに至れり。

耶蘇教徒の内
争

「ジェシ、イ、ト」教徒が北支那に於て、清廷の信任を博するに従ひ、南支那に來れる自餘の舊教徒は之を嫉み、種々其布教の方法を非難し、其争論漸く烈しく、遂に之を羅馬法王に訴へしかば、皇紀二千三百六十四年「クレメント」十一世は、「ジェシ、イ、ト」教徒を譴責せしも、聖祖は反つて之を保護し、皇紀二千三百七十八年

天主教の禁令

自餘の耶蘇教徒の退去を命じ、皇紀二千三百八十四年(世宗の初年)に至り、更に天主教(耶蘇教)の禁制の嚴令を下し、かば、耶蘇教の傳播は斯に一頓挫をきたせり。

第四章 俄羅斯の東侵及清と俄羅斯との關係

宜萬三世欽察
汗に背く

葡萄牙、荷蘭以下の諸海國が、南方より東洋に航行する間に、俄羅斯(即阿羅思)は北方より次第に東方亞細亞に逼る。宜萬一世の時より、「モスカウ」太公は欽察汗の信任を得て、國勢漸く張りしが、皇紀二千百廿二年宜萬三世立つに及んで、俄羅斯の諸侯を大半併呑し、遂に欽察汗に背きて獨立を恢復せり。曩に「ユイリダヤク」は帖木兒の後援により、「トクタミシ」に代りて欽察汗となりしが、帖木兒の退軍と共に、「トクタミシ」の黨與

欽察汗國の分裂

喀山、哥里米の二汗國

欽察汗國の滅亡

復叛き、白黨の汗と哥里米の汗と相争闘して止む時なし。哥里米汗、ウルク、ムハメド、一時欽察汗の位を占めしも、皇紀二千九十七年白黨汗、クチュク、ムハメドの爲に破られ、ウルク河上流の不里阿兒の地に遁れて、喀山汗の祖となる。クチュク、ムハメドは皇紀二千百廿年を以て死し、子ア、メ、ド嗣ぎしも、是時欽察汗國殆分崩し、汗の號令は僅に國都薩來附近に行はるゝのみ。北には喀山汗あり、西南黒海に濱して哥里米汗あり。東南阿拉海附近一帯には月即別族蕃殖し、東吉利吉思荒原附近には、吉利吉思族跋扈せり。宜萬三世は此好機に乗じ、喀山、哥里米の二汗が欽察汗と深怨あるを利し、之と同盟して、ア、メ、ドに背く。ア、メ、ドは俄羅斯の怨敵なる波蘭土と結託して、宜萬を伐ちしが、反つて陣歿し、欽察汗國斯に亡び、俄羅斯は其獨立を恢復せり。實

大幹兒朶及阿斯坦拉之二汗國

哥里米汗と「ウツシリ」四世との同盟破裂す

に皇紀二千百四十年なり。

欽察汗國已に滅亡せしも、ア、メ、ドの子孫は尙「ドン」「ウラル」兩河の間を占領して、大幹兒朶汗國を建て、ア、メ、ドの從子等は別に「ウルガ」河の下流に阿斯坦拉汗國を建て、波蘭土と通じて宜萬を防ぎ、宜萬は喀山、哥里米の二汗と其同盟を繼續して之に當り。皇紀二千百六十二年哥里米汗、メングリ、ギライ、遂に大幹兒朶汗國を滅ぼして國勢日に振ふ。其子「ムハメド」「ギライ」の時、喀山汗の血統絶えしかば、彼は其弟を喀山汗に推せしに、宜萬三世の子「ウツシリ」四世は、哥里米汗の強大なるを恐れて、之を拒みしより、二國の同盟敗れ、喀山汗國には俄羅斯黨と哥里米黨との兩派を生じて相争ひしが、後喀山汗及阿斯坦拉汗は哥里米汗と通じて、俄羅斯に抵抗するに及んで、「ウツシリ」四世の子

欽察地方の諸汗國前後俄羅斯の版圖に歸す

俄羅斯の宜萬四世西伯利亞經略に従ふ

悉畢兒汗庫程と「ユサク」部長「エルマルク」と

「ユサク」兵滿洲に入る

宜萬四世は、皇紀二千二百十二年遂に喀山汗を滅ぼし、其後二年にして又阿斯坦拉汗國を併せり。蒙古族が欽察地方に建設せし諸汗國、今や前後滅亡し盡き、唯哥里米汗國を餘す。哥里米汗は喀山、阿斯坦拉の兩汗と協力して、俄羅斯の侵畧に抵抗せしも奏功せざりしかば、南土耳其帝國の保護を仰ぎて、其國命を維ぎしが、皇紀二千四百四十三年に至りて遂に俄羅斯に併吞せられたり。宜萬四世已に蒙古族の諸汗國を討滅し、更に東方を經略せんと欲す。時に、ドン、湖畔の「ユサク」部長「エルマルク」なる者、其部下を率ゐ、宜萬の爲に西伯利亞の遠征に従ふ。曩に金黨汗の衰へて欽察汗國の分裂するや、月即別族は阿拉海、裏海の北邊一帶に割據せしが、皇紀二千二百十六年昔班の

後裔庫程は、今の「トボルスク」附近の月即別族を率ゐて、悉畢兒汗と號し、吉利吉思族及「オスチヤク」族を羈屬し、其勢を負うて、屢俄羅斯の邊境を攻掠せしが、皇紀二千二百四十年「エルマルク」は連に庫程汗を破りて其地を畧し、之を宜萬四世に獻ぜり。宜萬四世の孫「ミケル」三世俄羅斯に君臨するに及んで、益「ユサク」を派出して東方を經畧せしめ、皇紀二千二百七十八年新に「也尼塞」河畔に城堡を建て、後十年にして又「昂可拉」河岸に壘壁を築き、此の如くして次第に此地方の「オスチヤク」、「通古斯」の諸族を服従し、皇紀二千三百三年より黒龍江に沿うて、漸く滿洲の北部に侵入し來れり。時に清朝は南方の經畧に忙はしく、北を顧みる能はず。滿洲地方の守備隊は、反つて「ユサク」の爲に、屢敗衄を被れり。

清の聖祖「コ
サック」兵を撃
退す

尼布楚に於け
る清魯使臣の
會合

聖祖已に吳三桂の亂を平げ、又臺灣を下し、南方略平定するに及んで、「コサック」を攘はんと欲し、墨爾根、齊々哈爾(共に嫩江の沿岸)の守備兵を増し、皇紀二千三百四十五年遂に彭春をして、水陸の兵一万五千を率ゐ、「コサック」兵を雅克薩城(即アルパヤン、黒龍江の上流)に攻めて之を陥れしめしが、幾ならずして、「コサック」兵又之を復せしかば、聖祖遂に荷蘭人を介して、書を俄羅斯に送り、邊境を定むるを請ふ。時に彼得、一世俄羅斯の皇帝たりしが、之に應じ、公使「ゴロウ、ン」(費羅)を派出す。聖祖も亦索額圖をして、「ジエシユ、ト」教徒「ペラ、ラ」(徐日昇)、「ゲル、ロ、ン」(張誠)を隨へ、色楞迦河岸に往き、之と會合せしむ。是時準噶爾部は喀爾喀部と方に交戦して、外蒙古大に擾れたれば、中途より還り、更に尼布楚(黒龍江の凍流什)に會合して、境界を議定せしが、清國公使の護衛兵頗多く、加之「ジエシ

「イト」教徒は、極めて強梗手段をとりしかば、「ゴロウ、ン」數歩を譲り、外興安嶺以南の地を悉く清國に附與せり。實に皇紀二千三百四十九年なり。聖祖は新に黒龍江沿岸に屯田兵をおき、此方面の守備を嚴にせしかば、俄羅斯遂に南下する能はず。

第二篇 清の塞外經略

第一章 準噶爾部の跋扈

元の世祖拔思巴を帝師に拜せしより、其後嗣世々圖伯特の喇嘛を總管せしが、其衣帽紅色を尙ぶを以て、之を紅教喇嘛といふ。紅教喇嘛は密呪を旨とし、妻子を蓄へ、其弊害少からず。殊に元及明初の間、支那政府の尊仰を受けしより、頗る華侈驕惰に流

紅教喇嘛

宗喀巴の宗教
革新

黃教喇嘛

る。方には是時に當り、宗喀巴出で、大呼喇嘛教の革新を唱ふ。宗喀巴は皇紀二千七十七年を以て西寧(寧甘)に生れ、幻術を排し、帶妻を禁じ、紅教喇嘛に伴隨せし幾多の弊害を除きて、新喇嘛教を組織す。彼は紅教喇嘛に反對して、黃帽黃衣を着せしが故に、黃教喇嘛の名あり。黃教は大に世人の歡迎を受け、幾ならずして紅教と相頡頏するに至れり。宗喀巴は皇紀二千百卅九年を以て寂し、其最高弟は達賴喇嘛として圖伯特の首府、拉撒に居り、次高弟は班禪喇嘛として拉撒の西、札什倫布に居り、黃教喇嘛を分管す。宗喀巴已に帶妻を非認せしが故に、特別なる相續法を創設し、達賴、班禪の兩喇嘛は死せず、唯呼畢爾罕(身化義)として轉々出現して、衆生を濟度する者と定めたり。

皇紀二千二百三年三世達賴喇嘛立ちしが、德のありて漸

達賴喇嘛と班禪喇嘛

黃教の傳播

く蒙古諸部の尊信を得、遂に俺答、黃台士等の懇請に従ひ、親しく漠南蒙古部に布教を試みたり。俺答の曾孫、彼に繼ぎて四世達賴喇嘛となるに及んで、黃教は益其勢力を内外蒙古及伊犁地方に張り、皇紀二千二百六十四年、土拉河畔の庫倫に大喇嘛をおき、其地方の教務を辦理せしむるに至れり。然れども黃教の勢力増進するに従ひ、紅教喇嘛は嫉妬の念を高め、遂に拉達克(圖伯特西端)の酋長藏巴汗を引ききて、黃教を抑壓せんとせしかば、五世達賴喇嘛は衛拉部を招致して之を拒がしむ。

紅黃兩教の争

衛拉の四部

衛拉(瓦剌)部は也先の死後久しく振はず。或は月即別族に西邊を襲はれ、或は土默部に東境を擾されしが、明末清初、蒙古諸部の衰微せるに乗じて、復漸く強大となる。當時衛拉部は更に四部に分かる。一を準噶爾部といひ、伊犁に居り、一を都爾伯特部と

紅教の敗亡と
黄教の勝利と

いひ、厄爾齊斯河上に居り、一を土爾扈部といひ、塔爾巴哈台附近に居り、一を和碩部といひ、烏魯木齊附近に居る。五世達賴喇嘛の命を受くるに及んで、和碩部長固始汗は、自餘の三部の後援を得、青海地方より圖伯特に入り、藏巴汗を撃ちて之を殺す。是に於て紅教喇嘛は南、不丹、泥波爾地方に逐はれ、圖伯特、全土は遂に黄教喇嘛に歸せり。實に皇紀二千三百三年なり。固始汗の子孫は、爾後青海地方を根據として、圖伯特の兵權を掌握し、又屢使を清廷に派して好を通ぜり。達賴、班禪の兩喇嘛は、唯宗教上の事務を總裁し、一般の世務はすべて第巴と稱する一種の喇嘛に委ね來りしが、桑結なる者、第巴となるに及んで、其五世達賴の近親たるの故を以て、威勢頗強く、和碩部の干渉を脱せんと欲し、竊に準噶爾部を招く。

第巴桑結

準噶爾部長噶爾丹

皇紀二千二百六十年の頃、巴圖爾、渾臺士、準噶爾の部長となり、土爾扈部、都爾伯部を征服して、勢威漸く強大となる。渾臺士の長子、僧格嗣ぎしも、幾ならずして叛者の手に斃れ、其弟噶爾丹喇嘛となりて、圖伯特に在りしが、歸りて亂を靖め、準噶爾部長となる。時に皇紀二千三百卅三年なり。噶爾丹の圖伯特に在るや、桑結と親交ありければ、準噶爾部に長たるに及んで、彼の爲に和碩部を挫かんと欲し、和碩部が準噶爾部の叛衆を納れたるを名とし、皇紀二千三百卅七年大に固始汗の子達顏汗を破る。噶爾丹已に青海、圖伯特を服し、尋で又天山南路を併す。喀什噶爾汗、キズル曩に帖木兒に服従せしが、帖木兒の死後、中央亞細亞の騷擾せるに乗じ、彼の後嗣は漸く地を西に開き、皇紀二千百九十一年、ラシド嗣ぐに及んで、頻に地を東に擴め、殆

喀什噶爾汗の
衰微と和卓の
興起と

噶爾丹白山派
を助けて天山
南路を一統す

天山南路を統一せしが、皇紀二千二百卅二年「ラシド」の死と共に、喀什噶爾汗の勢威全く衰ふ。喀什噶爾汗の盛なるや、中央亞細亞の回教の貴僧の天山南路に來住する者頗多し、之を和卓といふ。彼等は喀什噶爾汗、殊に「ラシド」の尊信を得、領地を受けて、其勢威日に強く、喀什噶爾汗の衰微するに及んで、代りて天山南路の政權を掌握せしが、其間黒山、白山の兩派を生じて相争ふ。白山派の「アバク」は、黒山派の「イスマイル」に逐はれて、圖伯特に奔り、援を五世達賴に求む。噶爾丹は達賴喇嘛の命を奉じ、黒山派を撃破して、「アバク」を喀什噶爾に擁立す。時に皇紀二千三百卅八年なり。爾後八十年間天山南路は全く準噶爾部の有に歸す。噶爾丹已に天山南路を統一し、又青海、圖伯特を征服し、今や其

兵を東して喀什噶部を外蒙古に撃たんとし、斯に清との衝突起る。

第二章 清と喀什噶部及準噶爾部との關係

明の中世以後、韃靼は大別して三部となる。科爾沁部は蒙古の東部、興安嶺附近に居りて、成吉思汗の弟「朮只」の後裔之に君臨す。科爾沁部の西北、今の外蒙古一帯を、漠北蒙古部、一に喀什噶部といひ、其南内蒙古一帯を、漠南蒙古部といふ。共に多くは成吉思汗の後裔の君臨する所に係る。韃靼三大部の中、科爾沁及漠南蒙古部は、早く清に來歸せしも、喀什噶部は未だ降服せず。喀什噶部は韃靼の大汗「達延」の末子「札賚爾」の封地にして、後更に分れて三部となる。札薩克圖汗は西部に在りて、杭愛山の西

韃靼の三大部

喀什噶部の三汗

準噶爾部の
喀爾喀部の
侵す

喀爾喀部の
保護を仰ぐ

麓一帯を占め、土謝圖汗は中部に在りて、土拉河流域を占め、車臣汗は東部に在りて、克魯倫河流域を領す。喀爾喀部の西、天山の北部一帯の地は、衛拉部に屬し、兩部の土壤相接するを以て、素より相善からず。準噶爾部の噶爾丹、已に衛拉部を統一するに及んで、東喀爾喀部を襲はんとす。喀爾喀部の三汗相和せざるを機とし、皇紀二千三百四十八年大舉して、喀爾喀部に侵入す。蒙古地方の喇嘛等皆之に應ぜしかば、三汗の部落土崩して東奔す。遂にして清使索額圖の至るに遇ひ、遂に清の保護を仰ぐ。清の聖祖噶爾丹に諭して、兵を收め、侵地を還さしむ。聽かず。長驅して、内蒙古の東部に逼りしかば、皇紀二千三百五十年、聖祖は皇兄福全、皇子允禔等をして、之を西喇木倫(遼河の上流)附近に逆撃せしめしが、爾來尙漠北を擾し、を以て、皇紀二千三百五

清の聖祖大に
噶爾丹を破る

策妄阿拉布坦
伊犁に據る

十六年、聖祖遂に親征の軍を起し、克魯倫河を溯りて、連に噶爾丹を追ひ、遂に大に之を昭莫多(土拉河の南)に敗る。曩に噶爾丹の準噶爾部に長となるや、其兄僧格の遺族を殲して、後患を絶たんとせしかば、僧格の子、策妄阿拉布坦は、巴爾噶斯湖畔に遁れしが、此機に乗じて、伊犁に歸り、義故を糾合して、清に通ず。噶爾丹腹背敵を受け、遂に自殺す。聖祖守兵を科布多に留め、漠北を鎮せしめて、軍を還へす。青海の和碩部は、噶爾丹の死を聞き、準噶爾部に叛きて、復清に降れり。圖伯特の第巴桑結は、さきに準噶爾部長噶爾丹の助により、和碩部の勢力を打破して、より、其權威圖伯特に遍ねく、皇紀二千三百四十二年、五世達賴死するに及んで、秘して喪を發せず。自から六世達賴を擁立して、益權勢を擅にせしが、噶爾丹敗亡す

和碩部長拉藏汗第巴桑結を殺して圖伯特の全權を握る

策妄阿拉布坦和碩部を破りて拉藏汗を殺す

るに及んで、故の和碩部長達顔の孫、拉藏汗は父祖の遺業を恢復せんと欲し、皇紀三千三百六十五年、拉藏に入りて桑結を殺し、且六世達頼を囚へ、新に六世達頼を擁立す。清の聖祖も桑結の噶爾丹と通ぜしを惡みければ、拉藏汗を保護して、圖伯特を鎮せしむ。然れども圖伯特の喇嘛等、拉藏汗を悦はず。蒙古の諸部も亦彼が擁立せし新達頼喇嘛に服せずして、別に達頼喇嘛を選びて之を甘肅の西寧に奉ぜり。準噶爾部の策妄阿拉布坦此機に乗じて圖伯特に侵入す。策妄阿拉布坦武略に富みて大志あり。準噶爾部を領して以來、頻年兵を西に出し、吉利吉思族を破りて大に地を開きしが、圖伯特の紛擾を機とし、皇紀二千三百七十七年、大舉して拉藏を襲ひ、拉藏汗を殺す。圖伯特の喇嘛多く之に應ず。聖祖變を聞き、

聖祖圖伯特を占領す

駐藏大臣をおく

準噶爾部と俄羅斯との交渉

皇子允禔を圖伯特に向はしむ。準噶爾の兵避けて伊犁に退きしかば、清軍拉撒に入り、西寧の達頼喇嘛を迎へて六世達頼となし、悉く準噶爾部に通ぜし喇嘛を誅殺す。實に皇紀二千三百八十年なり。清の威力圖伯特に振ふ。青海の和碩部は、清威の圖伯特に逼ねきを嫉み、皇紀二千三百八十二年、聖祖死し、世宗(雍正)新に立つを機とし、青海、圖伯特の喇嘛を煽動して亂を起し、世宗四川、陝西の兵を發して之を撃破せしかば、叛衆多く北の方、準噶爾部に投ず。世宗是より圖伯特の鎮撫、喇嘛の保護を名として、清兵二千を派し、駐藏大臣を拉撒におく。時に皇紀二千三百八十四年なり。準噶爾部の策妄阿拉布坦、さきに圖伯特に失敗してより、後、屢俄羅斯と兵を交ゆ。俄羅斯帝彼得一世は、天山南路に沙金多し